青い花（三幕）

人物

朝川猛。　某大學教授。三十五歳。
芳子。　猛の妻。二十七歳。
みどり。　猛の娘。五歳。
正輝。　猛の父。牧師。
民子。　猛の母。
高山美智子。　正輝の親友の娘。二十八歳。
長谷部三郎。　新聞記者。二十四五歳。
其他。

時代　當今。

場所　東京。

第一幕

（市内某病院小兒科病室。いゝみどりの臥てゐるベッドの側に、母芳子、祖父正輝、祖母民子の三人が附き添つてゐる。クリスマス近き或る日の朝。遠く聞える電車の音にて幕上る。）

正輝。（今迄頰杖についてゐた片手をはなして）はあて。電車かな。電車も動き出したやうだな。

民子。（小さい時計を出して見ながら）五時半ですか。追付け明るくなりますね。

正輝。それぢや私達二人は、一遍家へ歸つて來よう。クリスマスの用意も全然して無いんだからな。

民子。でも、大丈夫でせうか？　こちらを斯うして、芳さん一人にして置いて。

芳子。大丈夫ですよ。熱もあれつきり減いてしまつたし、それにただのインフルエンザだけで濟んだんですから。本當に大丈夫ですよ。

民子。兎に角、肺炎なんぞにならないで、何よりでしたねえ。矢張私達のお祈りが聽かれたんですね。

正輝。（格別の力も入れず）うむ、然うだ。だが、油斷しちやいけない。私も夕方に復來て見る。（外套を羽織りながら、いゝみどりをのぞいて見て）うむ、熟くねてゐるな。

民子。それぢや芳さん、氣をつけて下さいよ。（コオトの紐を結びながら）あ、それから、猛の處へは如何しませうね。電報を打つときませうか？　わざわざ歸つて來ないでもいいつて。

芳子。（扉の方へ二人を送り出しながら）だけども、發つたあとでせうから、よござんすわ。

正輝。然うだ。ことに依つたらもう、そろそろ此方へ着く頃かも知れない。

民子。然うですね。昨日の朝、あの電報を見ると、直ぐに發つたかも知れないんですわね。

正輝。まあ可い。同じ無駄でも、斯う云ふ無駄が出來るのは、あまり悪いものぢやないからな。はツはツは。

（民子も笑ひながら、正輝のあとから出て行く。扉の外にて二人の聲。）

いゝや、こいつは寒いなあ！

民子。寒い筈ですよ。あれ、あんなに白い物が

降つてゐるんですもの。

（芳子、窓際へ引き返して來て、徐にカアテンを引きしぼりながら、白み行く東の天を見上げてゐる。電車の音再び鮮かに聞ゆ。やがて看護婦高山美智子、入り來る。）

美智子。先刻から交代に參る筈のが、生憎少し加減を惡くしたと申します故、はじめての私が參りました。御氣毒樣でございます。

芳子。（みどりの枕邊近く歸りて）いいえ。こちらはもう大變に快くなつたのですから。

美智子。御容態はあちらで詳しく伺つて參りましたけれど、一寸……

（病床日誌を取りて一覽する。芳子はベッドの周圍を片附けてゐる。）

（日誌を閉ぢて表紙を見たとき、我知らず絶叫する如き調子にて）朝川さん！（直に平靜を回復して）朝川さんと仰しやるんでございますね。

芳子。（何氣なく）ええ、朝川みどりと申しますの。

美智子。只今、御眠みになつていらつしやいますか？

芳子。大層氣持よささうに眠んで居ります。

美智子。それぢや、體溫なんかも後程……

（二度三度、病床日誌を取り上げたり、みどりの寢顏をのぞいたりして落ちつきなし。やがて、決然たる面を電燈の方へ向けながら口を開く。）

失禮でございますが、朝川さんと仰しやると、もしかしたら麻布教會の朝川さんの御親類ではいらつしやいませんでせうか？

芳子。はあ、あれは此子の祖父にあたりますの。

美智子。では、此方の御父樣は？

芳子。（美智子の狼狽と熱心とに初めて心付きながら）此子の父ですか？

美智子。朝川猛さんでございますね？

芳子。はあ、朝川――猛。

美智子。（半ば獨白のやうに）ぢや、矢張然うだつた！

芳子。あの、朝川を、猛を御存じなのですか？

美智子。（芳子の問ひに答へずして）では、先刻廊下で擦れちがつたのは、矢張こちらの御祖父樣でございましたのね。

芳子。はあ――多分。

（二人とも少時無言。）

美智子。（再び決然たる態度を取り返して）あ、失禮いたしました。朝川さんを知つてゐるかと云ふ御尋ねでございましたのね。

芳子。はあ。猛を御存じなのですか？

美智子。はあ。……よく存じて居ります。猛さんばかしでなく、御祖父樣御祖母樣はじめ、御一家の方殘らず存じて居ります――はじめて御目にかかるのは、多分貴女がた御二人きりでせうから。

芳子。まあ！　左樣でございますか？

美智子。私は美智、高山美智と申しますの。

芳子。（首をかしげて）高山美智子さんと仰しやるんですね。

美智子。判然した御記憶はなくとも、折々は此名前が御耳にはひつたことと思ひます。（短き間）丁度八年ばかり前までは、私も朝川家の家族の一人のやうにして頂いてゐましたから。

芳子。然う伺つて、やつと思ひ出しました。お祖父さんのお友達の方の御孃樣といふのが、何でも善く御出來になる方といふのが、二三年の間、猛なんかと御一緒にいらしたといふこと、やつと思ひ出しましたわ。

美智子。何でも善く出來るつて！（笑ひながら）それだけは人違ひのやうですね。私はまた、

隨分惡く言はれてゐても、仕方がないと思つてゐましたの。

芳子。まあ！　どうしてでせう？

美智子。惡く言はれても仕方のないやうな事をしてゐるんですもの。（思ひ出したやうにみい、どりのベッドをのぞいて見て）まだ、御眠みですかしら？

芳子。ええ。まだ。

美智子。別して小母さんには――この方の御祖母様のことを、斯う呼びなれてゐましたから。別して小母さんには、濟まない事をしたと思つて居りますの。

芳子。然う仰しやれば、母がいつか貴女の話をしたあとで、隨分失禮なことを云つてゐたのを思ひ出しましたわ――あんな義理知らずをするやうになるのも、矢張本當の信仰がなくなつたからだなぞと、失禮なことをね。

美智子。義理知らずと言はれても、何と言はれても足りない位ですわ。

芳子。まあ！　どんな事をなすつたでせう？　貴女が！

美智子。もう一年ばかしで女學校を卒業するといふ時、流行の腸チブスで兩親ともなくしてしまつた私が、小母さん達の御手許へ引き取られてからの、その不仕合せな仕合せは…（センティメンタルに言葉をきつてしまふ。）

芳子。（同じくセンティメシタルに）まあ、然うですか！

智子。そんな御恩を受けながら、私は突然に、默つて小母さん達から姿をかくしてしまひましたの。

芳子。あの、突然に？

美智子。ええ、私自身も前の日まで、全然思ひ設けなかつたほど突然に！

芳子。そして、默つて？

美智子。默つて、姿をかくしました――あれつきり何方にも御目にかからないつもりで！

芳子。まあ！

美智子。ですけれど、奥様、何故私がそんな事をしたかは、どうか訊かないで下さいまし。

芳子　まあ！　何故でせう？　何故また其理由を御訊ねして惡いでせう？

美智子。斯うしてお話してゐると、だんだん勇氣がなくなりさうですけれど、私はもう一度…

芳子。もう一度？

美智子。然うです、もう一度姿をかくさなくちやならないやうに思ふんですもの――此儘貴女がた御二人のほか、どなたにも御目にかからないで！

芳子。まあ！（短き間）あの、誰にも、猛にも御會ひにならないで？

（美智子、空椅子の角につかまり、だいぶ明るくなつて來た外を、ぢつと見守りながら沈默。）

（同じく面を反けて）猛に御會ひになつても惡いのですか？

美智子。（自分の耳を疑つたかの如く）え？

芳子。猛に御會ひになつても惡いのですか？――斯うしてゐる内にも歸つて來るかも知れませんが。

美智子。歸つていらつしやる？　あの、どちらへか御旅行になつてゐましたの？

芳子。ええ。田舍の方へ講演のやうなこと頼まれて、先達て中から出かけてゐたのです。

美智子。（別の事を考へながら）然うですか。

芳子。どんな御事情が御有りか存じませんけれど――

美智子。え？　何と仰しやいましたの？

芳子。どんな御事情が御有りか存じませんけれど、此儘御目にかかれないでしまつたら、猛に

とつてもさぞかし殘念な事だと思ひます。あとで、きつと殘念がりますわ。

美智子。（俯き勝にしながら）然うでせうか？

芳子。御目にかかれたら、そして昔の御話でも伺つたら、きつと、きつと悦びますわ。

美智子。本當に、然うでせうかねえ。

芳子。ええ、きつと。きつとですわ。

美智子。奧様！――これよりも、もつと親しい呼び方をしたいのですけれど。奧様、私はもう、逃げ時を過ごしてしまつたやうですわ。逃げ損つてしまつたやうですわ。

芳子。では――

美智子。兎に角、この御孃様が御目覺めにならない内に、可愛い御聲の一聲も聞かない内に、此看護服を脱ぎすてて行くことは、私にはとても出來さうに思はれませんの。

芳子。ではあの人にも、猛にも御會ひになつて下さいますの？

美智子。ええ、御目にかかりますわ。御目にかかりますとも――貴女がた御兩人の御側近くでならば！

芳子。え？ 私と此、みどりの近くでならばと仰しやるの？

美智子。（稍や周章へて）ええ。然うです。（短き間）こんな露骨な事を言つて、御免なさいまし。何故ですか私は、奧様と御孃様との御側近くにゐれば、もうなんにも恐いものなんかないやうに思はれて來ましたの。

芳子。まあ！ そんな事を仰しやると、何と申し上げたらいいか分らなくなりますわ。

美智子。御免なさいまし、何時の間にか、ついこんな失禮な事を申し上げたりなんかするやうな、惡い癖が附いたのですから。

芳子。あら、そんな… 御詫びなんぞなすつちや困りますわ。

（二人とも少時の間苦しき沈默。）

（思ひ出したやうに立ち上り）これで二晩とも、ずつと續いて眠らないものですから――

美智子。（同じく立ち上り、無意味にみどりのベッドの方へ近づき）さぞ御疲れになりましたでせうね。

芳子。一寸楊枝でも使つて參りますから。

美智子。さあ、どうぞ。

（芳子、出て行く。美智子、窓際に近づき、さきに芳子のなしたる如く、ぢつと外を見てゐる。扉の外を足音高く過ぎ行く者のあるに驚かされ、窓際を離れてみどりの枕邊へ寄り、芳子の坐つてゐたところに坐る。やがて先程の足音が引き返して來て、扉の外にとまる。）

猛。（扉の外にて、遠方の人に話しかける如く）あ、此處ですか。有難う。（扉をあけてはひり、一直線にみどりのベッドへ近づき）容體は如何です？ まだ大丈夫ですか？

美智子。經過が大變に御宜しいので ございます。

猛。經過が良い？ 然うですか。（はじめて帽子を脱ぎ額の汗を拭ふ。）

美智子。昨日は、お晝前からだんだんとお熱も下り、夕方には、召し上る物もだいぶ召し上れるやうになりました。

猛。然うですか。（みどりの顏をのぞいて見る。）

美智子。此分ならば、もう御心配遊ばさないでもお宜しいさうでございます。

猛。成程。熟く眠てゐるやうだ。

美智子。はあ、熟く御眠みになつていらつしやるものですから、まだ拜見しないで居りますけれど、御熱なんかも殆んどなささうでございます。

猛。まあ、可かつた――肺炎にでもなりさうだと云ふ電報だつたものだから、隨分心配しま

したよ。

美智子。左様でございませうともね。

猛。時に、家の者は、家内なんかどうしたんでせう？

美智子。奥様は只今一寸……直ぐにいらつしやいますでせう。

猛。ああ、然うですか。

（猛、うなづきながら外套をぬぎかける。美智子、それを手傳ひ、ぬがせたる外套を抱き締めるやうにしながら、默つて立つてゐる。一旦椅子にかけた猛が、何氣なく振り向いて見たとき、美智子の樣子を不審に思ふ。乃ち起ちて美智子の方へ歩み寄り、その顏をのぞき込む。）

（驚いて）美智子さん！

美智子。（殆んど猛の言葉と同時に）猛さん！

猛。美智子さんなのか！

（美智子、無言の儘覺えず後退りする。）

ちつとも氣がつかなかつた。

美智子。面目次第もありません。

猛。貴女に再び會へるとは思はなかつた――しかも斯う云ふ處で。實に意外だ！

美智子。私にも意外なのです。

猛。如何したのですか？ 一體如何したと云ふのです？

美智子。逃げ損つたのですわ。

猛。逃げ損つた。

美智子。ええ。

猛。又、逃げるつもりだつたのかい？ また僕達の目に觸れない處へ逃げてしまふつもりだつたのかい？

美智子。ええ。

猛。何故です？ なぜ然うして逃げるんです？ いや、それよりも、あのずつと以前に、どうして貴女が逃げ出したか、それからして僕達には解らない！

美智子。今でも？

猛。ああ、今でも解らないんだ。

美智子。そして――そして今、私がそれを話さなくちやならないと仰しやるんでせうね？

猛。然うです。斯うして再び貴女に會つて見ると、私は私の一家の代表者としてでも、先づ第一に此事からして訊いて見る必要がある。（短き間）まあ、お互に腰をかけよう。

（美智子、沈默のまま、それまで左に持ち右に持ち更へしてゐた猛の外套を壁にかけ、猛とはすかひに、みどりのベッドに近く椅子をよせてかける。そして折々みどりをのぞいて見ながら語り出す。）

美智子。私は矢張駄目なのね。

猛。どうして？

美智子。折角の決心が、すぐに崩れてしまふんですもの。（短き間）奥樣にお目にかかつた最初には、其儘貴方にもお目にかからないで行つてしまふつもりでしたの。

猛。ふうむ。

美智子。そして貴方にお目にかかつても、從前私の逃げ出した理由なんか、決して申し上げまいと思つてゐましたの。

猛。ふうむ。

美智子。そんな決心が、あとからあとからみんな崩れてしまつたわ。本當に駄目ね。

猛。兎に角――どうして、あんなに突然に、默つて飛び出してしまつたのです？

美智子。貴方も――猛さんも、あの時分の事を少しは記憶えていらつしやるの。

猛。斯うして美智子さんと向ひ合つて見れば、あの時分の事は、ちつとも忘れずに記憶えてゐるやうな氣がする。

美智子。お互に隨分よく喧嘩もしましたわね。

猛。然うだ。安神して喧嘩も出來る位に仲が善かつたね。

美智子。それに猛さんは、いくら怒つても恐くなかつたわ。

猛。だが然う云ふ美智子さんが、口惜泣きの名残りの消えない目で、直ぐに仲直りをしようと言ひ出したもんだよ。

美智子。だつて、小母さんが私達二人の喧嘩を、眞劍の喧嘩だと思つて心配するんですもの。

猛。母はあの時分、美智子さんを僕のお嫁さんにでもしたい氣だつたさうですね。

美智子。（わざと猛の言葉に答へずして）だけど、お互に喧嘩もしなくなつた時分には、また別の事で、小母さん達に御心配をかけるやうになつてゐましたのね。

猛。然うだ。僕が不自然に子供らしく振舞ふことを止めてから——

美智子。そして私が不自然に大人らしく裝ふやうになつてからですわ。

猛。僕はよく美智子さんを相手に、トルストイの話なんかしたつけ。

美智子。そして小母さんは、猛さんの危險思想にかぶれて、私までが正統派の信仰から離れて行くのを、何よりも心配だと仰しやつてゐましたのね。

猛。いや、僕の危險思想については、父の方が一層心配してゐた。

美智子。だけど、小父さんは教會で御說きになるほど、家庭で信仰のお話はなさいませんでしたのね。

猛。しかし、熊本の何とか山で何とかして、この日本國を救ふために、その爲めにクリスチアンになつたと稱してゐる父なぞは——

美智子。教會で讃美歌をうたふ前に、『君が代』の三唱することを發明したのも、たしか小父さんですつてね。

猛。然うだ。然う云ふクリスチアンは、人が神樣を信じなくなるよりも國家を信じなくなることを恐れるんだ。

美智子。それも、心から本當に恐れていらつしやるでせうか？

猛。少くとも、本當に恐れてゐるやうな顏をしてゐる。そして其必要があるんだ——別して今日の日本では、別して日本の耶蘇教仲間では。（短き間）兎に角、父はあの頃の僕のトルストイ熱を、爆發物のやうに恐れたものだ。

（美智子、沈默。ただ其膝をなでてゐる。）

（大事な用件を思ひ出したやうに）あツ！こんな話ばかりしてゐちやいけない。僕は美智子さんの說明をきいてるんだ。一體どうしたのです？どうして貴女は姿をかくしたのです？

美智子。つまり、其話をしてるんですわ。こんな順序を通つてでなくちや、その說明が出來ないんですもの。

猛。で——

美智子。でね。（短き間）貴方先刻、小父さんが猛さんのトルストイ熱を、爆發物のやうに恐れたと仰しやつたのね。

猛。ああ、然う言つた——たしかに。

美智子。その貴方も、猛さんのトルストイ主義を、小父さん以上に恐れた者のあることを御存じ？

猛。僕のトルストイ主義を僕の父以上に恐れた者？

美智子。ええ。

猛。さう云ふ人間が、僕の近くにゐたとでも云ふの？

美智子。ええ、極く近くに。事によつたら、小父さん小母さん位近いところに。

猛。母はしかし、父ほどに恐れてゐなかつた。それにトルストイのある一面は、むしろ承認してゐたやうにも思へる。

美智子。小母さんなんかぢやないわ。(間) 御解りにならない？

猛。謎のやうな話だな。

美智子。實は私です。

猛。美智子さんが！ 貴女が、僕のトルストイ主義を恐れた？

美智子。然うです。私は貴方に取次がれたトルストイの説を、ほかの誰よりも恐れてゐましたわ。

猛。だつて、貴女はあの時分、あれほど面白がつてあの——

美智子。トルストイを讀んでゐたぢやないかと仰しやるの？

猛。別してあの、性慾超越説なんか、僕と同じやうに、或は僕以上に同感してゐたぢやないか？ 同感すると言つてゐたぢやないか？

美智子。それや、然う言つてゐましたわ——たしかに。だつて、然う言はないでゐられなかつたのですもの。

猛。何故？

美智子。だつてあの時分の私は、猛さんと、少しでも異つた考へかたをするやうに思はれたくなかつたのですもの。

猛。では、美智子さんは心にもない事を言つてゐたわけだね？

美智子。ええ。(短き間) だけど、信じられないあの説を、どうかして信じたいと念じつめてゐましたわ。

猛。ぢや、信じたいとは思つてゐたんだね？

美智子。ええ。そして、事によつたら——

猛。事によつたら？

美智子。頭の隅つこだけでは、もう信じてゐたとさへ云へるかも知れないわ。

猛。そして、心臓の方で信じるまでになれなかつたと云ふんだね？ つまり、一方からは信じさせようとするし、一方からは信じさせまいとしたんだね？

美智子。ええ。ですから恐れたんですよ。

猛。あの性慾超越説をね。

美智子。ええ。そして、日の經つにつれて愈々恐ろしくなつて來ましたの。

猛。僕が愈々大眞面目に、あの説をかつぎ廻るやうになつたから？

美智子。それもあるわ。

猛。僕も冷汗が流れる——あの時分の事を思ひ出して見ると！

美智子。だけど、あの説がいよいよ恐ろしくなつて來たのには、ほかにもつと、もつと大きな理由がありましたわ。

猛。何です？——それは。

美智子。(少時躊躇したる後早口に) 私の心がもう、第一の過ちを犯してゐたからです——トルストイからもポオロからも、事によつたら、ナザレの耶蘇からも叱られるやうな！

猛。(悪意なき微笑をふくみながら) つまり、戀をしてゐたと云ふわけですね？

(美智子、沈默。此時有明の電燈が徐々に消えかかる。消え了りたるとき、窓の外俄かに明るくなる。)

(椅子を立ちて、稍や美智子を遠かるやうにしながら) 誰です？ 誰でした？——その御相手は？

美智子。(同じく立ち上りて、其椅子につかまりながら) そんなんぢやありませんわ？ ただ——

猛。ただ、貴女の方から思つただけ？

美智子。ええ。だけど、もう堪忍して下さいな！

猛。此上を訊いてはいけない？

美智子。猛さん！ (短き間) あんまりですわ！ 貴方も！

猛。(太息をついて) 然うですか！

(二人とも長き間の沈默。)

(再びもとの椅子にかけて、靜かに) しかし……しかし過ぎ去つた昔の事ですね?――そんな、つまらない事を思つて吳れたのは!

(二人とも再び無言。)

美智子。(扉の方へ 歩き出しながら) 奧樣のやうですね。

猛。(扉の外の足音が高らかに行き過ぐるを聞きすましたあと) 何をしてるんですかしら?

(二人とも復もや無言。)

(美智子がもとの所へ引き返して來るのを待ちて) 美智子さん、僕は知らうとも思はなかつた事を知つた。けれども、知りたいと思つてゐた事はまだ知らないでゐる。

美智子。では、今迄に申し上げただけでは、御察しを願つただけでは、私の姿をかくした理由として十分でないと仰しやるの?

猛。然うだ。それだけの事情では說明の出來ないものがある。

美智子。何でせう?――それは!

猛。だつて、前の日の夕方まで、いつもの通り僕達と一緒に食事をして、あの緣側に蚊遣りを焚いて、いつもの通り僕達と話をしてゐた美智子さんが、その翌る朝、夙起きの母さへ目を覺まさない中に、もう家を拔け出してゐたぢやあないか?

美智子。それがあんまり突然だと仰しやるの?

猛。然うだ。其あんまりな突然を成程と點頭かす爲めには、何かしら、もう一つ告白してくれなくちやいけない物がある。

美智子。だけど、その、もう一つの告白は本當に苦しいんですよ。

猛。貴女が、きまりわるさを我慢し切れないほど?

美智子。まあ、さうなの。だけど、直接には私の恥になるやうな事ぢやなくつて――

猛。誰の恥になる事です?

美智子。ぢや、思ひ切つて言つてしまひませうか?

猛。ああ。

美智子。(四邊を憚るやうに) あの夜、晝間の明るい處ではとても言へないやうなことを、年の若い女の、私の耳元で囁いた人間があるんです。

猛。(驚いて椅子から跳び起ちながら) えツ! 貴女に對して?

美智子。えゝ。私自身さへ顏を赤らめるやうなことを、明らさまに、私に求めた人間があるんです。

猛。へえ!(短き間) それこそ一體誰です? どいつです?

美智子。それは後で言はして下さいな。私は第一に、私自身がその爲めに如何なつたかを言ひたいんですから。

猛。と云ふと――

美智子。つまり私は、そんな馬鹿者を馬鹿者と思つただけで濟みませんでした。然うです。そんな人間の心を醜いと思つただけで濟まされず、私自身の心をも、本當に、たまらなく醜いと思つたのです。

猛。そして――

美智子。そして、もう一刻もぢつとしてゐられないやうに思ひました。直ぐにも逃げ出さねばならないやうに思ひました。

猛。逃げ出すと云つて、何處へ?

美智子。何處でも、兎に角、そんな人間の姿の見えないところへ、それから、私自身の醜さを成るべく忘れ易いところへと思つたのです。

猛。成程。それで、そんな白い服なんか着けるやうにもなつたんですね。

美智子。えゝ。だつて、子供と病氣と位、私

自身の醜さを忘れさしてくれるものは無いと思つたんですもの。

猛。成程。（短き間）だが、その馬鹿な眞似をしかけた奴といふのは、一體誰です？

美智子。誰だと思ひます？――猛さんは。

猛。僕達も知つてる人間ですか？

美智子。知り過ぎる位知つてる人間なの。

猛。へえ！ ぢや、始終家へも來てゐたやうな人間なのかしら？

美智子。それ處ぢやないわ。家の中にゐた人間なの。私達と一つお竈の御飯を頂いてゐた人間なの。

猛。だつて、あの時分、格別誰もゐなかつたぢやないか？

美智子。いいえ、ゐましたわ。

猛。（笑ひながら）まさか、あの書生の長谷部でもなかつたでせう。

美智子。（同じく笑ひながら）あの人も、二三度變な手紙をくれるにはくれたけれど。

猛。だつて、あいつは貴女よりも年下でもあり、それにあの時分はまだ、本當の子供のやうなものだつたでせう。

美智子。でも――

猛。然うですかねえ。

美智子。兎に角、私の云ふのはあの人の事ぢやないわ。

猛。（しばらく沈默の後）まさか僕の親爺でもないで　う――（體を搖ぶつて笑ひながら）あの時分からもう、大抵禿げてしまつてゐた、あの親爺でもないでせう！

美智子。さあ。

猛。（半ば眞面目になりながら）さあだつて？ そんな眞面目さうな顏をして！

美智子。本當の事實ほど、事實らしく見えないものはないんですから。

猛。えッ！

美智子。私もそんなに骨折つてまで、貴方に信じさせたくはないんですけれど。

猛。（辛うじて椅子に身を支へながら）ぢや、眞面目ですか？ ぢや、親爺が、僕の父が、その人間だと云ふんですか？

美智子。（きつぱりと）ええ、然うです。生憎とそれが事實でした！

猛。ふうむ。

（二人とも少時沈默。）

美智子。奧樣は如何なすつたでせうね？

猛。（殆んど無意識に）ああ、荊妻ですか。

美智子。本當に如何なすつたでせう。一寸行つて見て參りませうね。

（美智子、出て行く。あとに猛は、腕組みをして、室内を歩き廻つてゐる。）

芳子。（徐かに扉をあけて入り、猛を見て）あら！ 貴郎！ 御歸りなさいまし。

猛。（初めて目が覺めたやうに）あ、今歸つた處だ。

芳子。（卓の上に置かれてあつた猛の帽子を、外套と同じ處へ始末しながら）隨分御心配なすつたでせうね？

猛。（椅子にかけながら）うむ。歸つて見ても間に合はないかとさへ思つた。なにしろ、あんな電報だつたからな。

芳子。濟みませんでした。

猛。大變に快くなつたさうだね。

芳子。ええ、昨日のお晝頃から大變によくなつて來ましたの。もう大丈夫ださうですよ。

猛。俺もすつかり安神してるところだ。

芳子。私も、これで本當に安神しましたわ――先刻までは何だか……

猛。（良人らしく）心配が殘つてゐたと云ふのかい？

芳子。ええ。だつて、貴郎がまだ心配していらつしやると思ふんですもの。（短き間）貴郎、

汽車の中で少しはお寢れて？
猛。うむ。豐橋邊から横濱まで、ぐつすり寢込んぢやつた。
芳子。まあ、然う？
猛。心配は心配でも、矢張眠くなると眠つちまふものだな。
芳子。やつぱし貴郞はお祖母樣の子ですのね。
猛。お祖母さんも例に依つて盛に居眠りをしたのかい？
芳子。（笑ひながら）ええ、少しは。
猛。（同じく笑ひながら）そして目が覺める度毎に『お祈り』だらう。
芳子。ええ、お祈りも隨分なすつたわ。
猛。俺はゐないし、お前もさぞ持てあましたことだらうな。
芳子　でも、お祖父樣の方がもつと御困りのやうでした。
猛。成程ね。そして又、二人で理窟を言ひ合つたのかい？
芳子。ええ。
猛。『信仰も信仰だが』――と、お祖父さんが言つたらう？
芳子。（微笑しながら）本當に然う仰しやつたわ。
猛。するとお祖母さんが、『貴郞はいつでも、神樣よりもお醫者の力を信じていらつしやる』と張り上げたらう？
芳子。全く、その通りよ。（短き間）だけど、今度は、私にもだいぶ飛沫がかかつたわ。だつて、私が貴郞を信じ過ぎてるからいけないやうなこと、仰しやるんですもの。
猛。お前が俺を信じ過ぎる？
芳子。滿更然うも仰しやらないんだけれど、『どんなにしつかりした人間でも、神樣を信用するほど信用することは出來ない』――と、斯う仰しやるの。
猛。うむ。それは本當だ。
芳子。それからね、『だのに芳さんは、何でもかでも猛をばかり信用して、それで滿足してしまつてゐる。そして、神樣を信用する心にならないからいけない』――と、斯う仰しやるの。
猛。ふむ。
芳子。それからまだ、斯うも仰しやつたわ――今度のみどりの病氣なんかも、矢張私が信仰の心を起さないからだつて、つまり、私に對する一つの試みといふものだつて。
猛。ふむ。
芳子。そしてね、私にはもつと大きな試みが來るかも知れないんですつて！
猛。（舌打ちして）詰らない事を！　仕樣がないな。
（猛、一寸みどりの方をのぞいて見たあと、窓際へ行つて外を見る。芳子も同時に、みどりの上に掛けたる物を引上げなそしてから、猛のあとを追ふやうにして窓際へ近づく。）
芳子。（ぴたりと足を止めて）貴郞！
猛。何だ？
芳子。不思議な事があるものですね。
猛。（振り向いて）不思議な事？
芳子。ええ。
猛。どんな不思議な事――（急に思ひ出したる如く）ああ、然うか！
芳子。（もとの處へ引き返しながら）もうお會ひになつたの？
猛。（妙に狼狽したやうな調子で、曖昧に）ああ。
芳子。お會ひなすつて？――美智子さんとか仰しやる方に。
猛。うむ、會つた。
芳子。以前、貴郞がたと御一緒にいらした方で

すつてね。
猛。うむ。
芳子。それからずつと御會ひにならないんですつてね。
猛。然うだ。あの人に復會はうとは思はなかつたよ。
芳子。貴郎には御話しになつて？——あの方が姿を御匿しになつた理由といふのを。
猛。（愕然として）えツ！
芳子。貴郎、御聞きになつて？
猛。お前も聞いたのか？
芳子。私？
猛。お前も聞いたのかい？ あの話を！
芳子。いいえ。
猛。聞かない？
芳子。ええ、なんにも。（短き間）私なんぞ——
猛。なあに、格別の事でもないんだがね。
芳子。私なんぞ、伺はなくつたつてよござんすよ。
猛。困るなあ。
芳子。なんにも、御困りになることは無いわ。
猛。俺も今、苦しい地位に立たされてるんだ。
芳子。そして、私が貴郎の地位を苦しくしてゐるんでせうか？

猛。もう、止してくれ。お前は誤解してるんだ。
芳子。あら、誤解ですつて？
猛。うむ、お前は俺を——俺と美智子さんとの關係を全く誤解してゐる！
芳子。まあ！ 然うでせうか？ 然う見えるでせうか？
猛。（思ひ返したやうに）いや、これは俺の廻氣だつたかも知れないな。悪い事を言つた。
芳子。（涙聲で）いいえ、矢張私が悪いのよ。御免なさい。
猛。お詫びなんぞ、お互によさう。（短き間）俺はあの人に對して何も……ただ從前、兄妹のやうにしてゐたばかりだよ。
芳子。そんな事、ようく解つてますわ。ただね、あの方の事、これまで餘り伺つてゐなかつたものですから。
猛。然うだつたかなあ。
芳子。然うよ。御名前も覺えないでゐた位よ。
猛。だが、俺だけが話をしなかつたわけでもなからうからな。
芳子。あら！ そんな意味ぢや——
猛。誰か他の者から、美智子さんの事を聞いたことがあるかい？
芳子。お祖母様からは、たしかに聞いたと思ふわ。お祖父様からは何だけれど。
猛。（絶叫する如く）お祖父樣からは！
芳子。（驚き恐れて）あら！ 御免なさい。（短き間）また私、馬鹿な事言つたでせうか？ 御免なさい——いいえ、もうなんにも申しませんから。
猛。いや、お前が悪いんぢやない。
芳子。いいえ、みんな私が悪いからなんですわ。つまらない事ばつかし言ふからですわ。
猛。全く困るなあ。（短き間）いや、お前も看病づかれをしてゐるところへ、餘計な神經を興奮さして、濟まなかつたね。
芳子。貴郎こそ、御疲れになつてるところを——
（先刻より、みどりがベッドから頻に母を呼んでゐる。猛、まづそれに氣付く。）
猛。おい！ みどりが呼んでるよ。
芳子。え？
猛。さつきからみどりが呼んでるんだ。（斯く言ひながらベッドへ近寄る。）
芳子。あら、然う！（みどりの枕元へ駈け寄つて）御免なさい！ みどりさん！
みどり。（口惜しげに）母さんはいや！ 母さんはいゝや！
芳子。御免なさい！ 母さんはね、ちつとも知らなかつたの——貴女の御目覺めを！

みどり。いや、いや。母さんはいやよ！

猛。ひどく御機嫌を損じたねえ。

芳子。みどりさん、お父様が御歸りですよ――貴女の好きなお父様が！

みどり。お父様も嫌ひよ！

芳子。まあ！

みどり。父さんも母さんもみんな嫌ひ！　二人で御話ばつかしてるんだもの！　（幕）

第二幕

（翌年、四月中旬ある日の暮近く。朝川猛の書齋。正面中央に大窓、それをはさんで、左に外廊へ出る戸口があり、右に本戸棚がある。舞臺右側にも左側にも一つ宛出入口が附いてゐる。猛、テエブルに向つて、煙草を吹かしながら、右隣の室で美智子の彈くオルガンに耳をかしてゐる。）

みどりの聲。（隣室にて）今のは讃美歌でしよ？　ねえ、小母さん。小母さんが今彈いたのは讃美歌でしよ。あたし知つてるわ。

美智子の聲。（同じく隣室にて）然う？　みどりさん、今のを御存じ？

みどりの聲。知つてるわ。

美智子の聲。ぢや、御一緒に歌ひませうか？――みんなで。

みどりの聲。小母さんも、母さんも？

美智子の聲。ええ。御母様も御歌ひになりますのねえ？

芳子の聲。（同じく隣室にて）ええ、歌ひますとも。御一緒になら、何んでも歌ひますよ。

みどりの聲。だけどあたし、矢張唱歌の方が好き！――小母さんに教はつたあの――

美智子の聲。何でしたつけね？　『春高樓の』ですかしら？

みどりの聲。いゝえ、『天然の美』よ。

美智子の聲。『天然の……美』？

みどりの聲。（半ば歌ふやうな調子にて）『ソオラニイサヘエヅルウ』――あれよ。

美智子の聲。ああ、あれですか。

芳子の聲。みどりさん、餘程御氣に召したのね。

みどりの聲。母さんも歌つてくれる？

芳子の聲。歌ひますよ――小母さんに彈いて頂いて、みんなで御一緒にね。

（次ぎの歌を三人で歌ふ。）

そらに囀る鳥の聲
みねより落つる瀧の音
大波小波鞺鞳と
響絶えせぬ海の音
聞けや人々面白き
この天然の音樂を
しらべ自在に彈きたまふ
神の御手の尊しや。

春は櫻の綾衣
秋は紅葉の唐錦
夏はすずしき月のきぬ
冬は眞白き雪の布
見よや人々美しき
この天然の織物を
手際みごとに織りたまふ
神のたくみの尊しや

美智子の聲。こんな歌でも斯うして、みどりさんや御母様と御一緒に歌つてると、何だか大變に好い歌のやうに思はれますのね。

芳子の聲。全くね。

美智子の聲。私は斯うして御側に置いて頂くやうになつてから、これまでの悲しい事なん

か、だんだんと忘れて行けるやうに思ふんですよ。

（此時舞臺にては、猛、椅子を離れて窓の方へ歩いて行く。）

芳子の聲。私も此頃では……斯うして御一緒に何かしてゐるときが、本當に一番樂しい時ですの。

（少時沈默。猛、煙草の吸殼を棄て、腕組みをして窓かまちに凭りかかる。）

（前の言葉を追ふやうに）何故ですか私、美智子さんがいらつしやらないと、妙に淋しくなるんですから。

みどりの聲。小母さんも母さんも、そんな話はいや。もつと唱歌を歌ひませうよ。

美智子の聲。ええ、歌ひませうね。

みどりの聲。御父樣も呼んで來るわ。

芳子の聲。みどりさん、いけません。御父樣は御仕事ですから。

みどり。（扉から半身を現はして、父の書齋をのぞき）あら！御父樣はなんにもしていらつしやらないわ！

猛。ああ、御父樣もみんなの御仲間入りをしようと思つてゐたところだ。

みどり。（背後へ振り向き）御父樣も御仲間入りをするんですつて！

猛。みんなで此方へ來るがいい。花の散つてるところが見える。さあ、美智子さんもいらつしやい。

みどり。（父の大きな椅子に乘つかりながら）さあ、美智子さんもいらつしやい。

芳子。（美智子と共に書齋へはひりながら笑つて）また、『美智子さん』だつて！貴女は何でも御父樣の通りを仰しやるのね。

美智子。よござんすねえ――『美智子さん』でも、『美智子さんの小母さん』でも。（窓の外をのぞき）あら、あんなに花が！

芳子。綺麗ですことね！

美智子。櫻は全く、咲いてるところよりも、散つてるところの方が綺麗ですのねえ。

（少時の間、一同沈默。みどりはテエブルの上に鉛筆で何かいたづら書きをしてゐる。）

猛。（思ひ出したやうに）美智子さんは先刻、『しづかにゆふひの』か何か彈いてゐましたね？

美智子。ええ。よく御解りになりましたのね。

猛。教會や牧師は嫌ひになつても、讃美歌だけは嫌ひにならないんですか？

美智子。氣が附いて見ると、何時の間にか彈いたり歌つたりしてるんですの。

猛。矢張然うかなあ。

美智子。貴方も？

猛。僕も始終似たやうな經驗をしてゐる。もうとつくに無くなつた筈の物が、なかなか無くならないでゐる。

美智子。惡い事でせうか？

猛。強ち惡い事でもなからうね。

美智子。然うでせうか。

猛。少し異ふが――（芳子を指さして）此人に殘つてゐる、思ひ切つて舊日本的なところなんかも、僕は強ち惡いものだとは思ひたくないね。むしろ斯うした性格の――

芳子。あら、貴郎！そんな事を、人樣の前で！

猛。（笑ひながら）成程ね。だが、構はないぢやないか――他の人ぢやないし。

芳子。でも……

美智子。（笑ひながら）よござんすよ、奥樣。私は何ひたいんですから。

猛。いや、成程いけないな。別の話にしよう！

みどり。（今迄いたづら書きをしてゐた鉛筆を投げ出して）まだお話なの？　つまらないわ

ねえ！

美智子。さうそ、もつと唱歌をうたふ筈でしたのね。今度は何を歌ひましよ？

みどり。（考へながら）さうね。（短き間）あたし、唱歌よりも活動に行きたいな。

芳子。あら！　また活動？

みどり。小母さん、連れてつてくれる？

美智子。ええ、參りませうね。

みどり。母さんは？

芳子。母さんは、今晩は駄目なの。行かれないの。御父樣と二人でお留守番するわ。

みどり。（美智子の手を引張りながら）ぢや、小母さん。早く。さ！

美智子。はい、はい。では――

（美智子、猛夫婦に一寸お辭儀して、みどりに引張られながら右側の扉から出て行く。）

芳子。みどりさん一寸。貴女、下に毛のシャツを着てゐましたかしら？　夜分は寒くなりますから。

美智子。（扉の外にて）ええ、お召しになつてらつしやいます。（短き間）あら、そんなに駈け出しちや危いわ！

（芳子は、扉の方へ向いた儘立つてゐる。猛も同じく沈默。）

猛。（新しく煙草に火を點じて）おい、どうしたんだい？

（芳子、ふり返つて、無言の儘猛の方へ近づく。）

また何か考へ出したのかい？

芳子。いいえ。

猛。それなら可いけども……

芳子。（スリッパをぬぎ、室の一隅に置いてある寢椅子の上に坐り）美智子さんは善い方ね。

猛。美智子さんかい？

芳子。本當に善い方ね。みどりも仕合せですわ。

猛。うむ。なかなか好くお相手をしてくれるやうだね。

芳子。そして此頃ぢや、あの子も私より美智子さんを好きのやうですわ。

猛。（微笑しながら）まさか！

芳子。（眞面目に）いいえ、本當に。（短き間）矢張心から可愛がつて下さるからでせうね。

猛。お前だつて心から可愛がつてるだらう？

芳子。だけど、私なんぞ――

猛。だけど、私なんぞ駄目だと云ふのかい？

芳子。ええ。だつて――

猛。だつて？

芳子。あの方は本當に何でも御出來になるのね。

猛。うむ。

芳子。學問も御有りになるし――

猛。うむ。女であれ位出來るのは、たんとはあるまいな。

芳子。文學の事でも、美術の方の事でも……

猛。まあ、『客間の女王』になれる位の、趣味と才氣とはあるやうだな。（笑ひながら）だが、まづい食物を旨しく食べさしたり、出來さうにもないお金を何處からか拵へて來るやうな藝當では、どうしてもお前の方が上だらうな。

芳子。だから情ないわ――そんなつまらない藝當しか出來ないんだから。

猛。それをつまらない藝當だと思つてるんだからなあ！

芳子。だつて、本當につまらないんですもの。（短き間）私なんぞこそ、何の爲めに生れて來たか解らない人間ですのねえ。

猛。自分の生活を然うまで無意味な物と思つてゐるのかなあ。

芳子。全く無意味ですわ。

猛。ふむ。（短き間）氣の毒な事だね。
芳子。え？
猛。氣の毒な事だと云ふのさ。然うまで自分を不仕合せに感じさしてゐるといふのは。
芳子。不仕合せに感じると仰しやるの？
猛。うむ。
芳子。私は自分を？
猛。さうだ。
芳子。あら、そんな事！　私はちつとも、自分を不仕合せだなぞと思つてゐませんわ。いいえ、私は幸福ですわ。斯うして御側に置いて頂いてゐるのは、此上もない幸福ですもの！（自分で自分の言葉に感激して涙聲になりながら）こんな、つまらない女を、斯うして頂いてゐるのは、分に過ぎた幸福だと思つてゐるんですもの！
猛。（芳子の方へ二足三足歩み寄り）まあ、そんなに興奮しないがいい。（短き間）兎に角、お前もお前自身の生活を幸福に感じてゐるんだから、それで可いぢやないか。
芳子。ええ。だけど――
猛。だけどどうなんだ？
芳子。私自身はそれで可いとして、私のやうな馬鹿が斯うしてゐちや、あの子も馬鹿になつてしまひます。
猛。困るなあ。
芳子。それよりも、差當つては貴郎を不仕合せにします。してゐます。
猛。俺を？――俺を不仕合せにする？
芳子。ええ。
猛。どうして？
芳子。だつて私には、貴郎のいつも仰しやる、『本當の仕事』といふものが解りませんもの。
猛。ふむ、『本當の仕事』か！
芳子。そして私に解るのは、ただ貴郎の、毎日の御仕事だけなんですもの。
猛。ふむ。
芳子。そして私が斯うしてゐちや、貴郎はいつまでも、毎日のお仕事ばつかししていらつしやりさうですもの。
（二人とも少時の間無言。）
猛。（一時の考を振り落すやうに）馬鹿な！　俺もお前のヒステリイに仲間入りをしてゐた。少し氣を變へようよ。
（芳子、依然として沈默。）
ねえ。何か他の、もう少し面白い話でもしようよ。ね。
芳子。面白い話なんか、なんにもありませんわ。
猛。（太息をついて）美智子さんの姿が見えなくなると、何時でもこれだからな。一體、何故だと思ふ？
芳子。自分にも解りませんわ。
猛。そして、あの人が近くへ來ると、直ぐに普通の、健全な狀態に歸つてしまふぢやないか？
芳子。ええ。自分でも何故だか解りませんわ。
猛。だが、お前も近頃の事だねえ――然う云ふ愚にもつかぬ事を考へるやうになつたのは。
芳子。然うでせうか。
猛。元來が物を苦にし過ぎる、極く氣の小さい方ではあつたが……どうも、美智子さんが來てから――
芳子。美智子さんがいらしてから？
猛。うむ。要するに俺の思慮が足りなかつたのだ。
芳子。貴郎の思慮が？
猛。然うだ。あの人を來さしたのが――
芳子。あら、私ですわ――あの方に來ていただくやうに御願ひしたのは。然う言つて惡ければ、私とみどりの二人でしたわ！
猛。だが、俺があの時――

芳子。いいえ、貴郎はあの時仰しやいました――ただ折々來て頂いたり、此方からも御訪ねしたりする位にしたらと。
猛。それや然う言つたかも知れないが。
芳子。貴郎が然う仰しやるのを、强情に私が御願ひしたのです。
猛。然う云へば、あの時のお前は不思議に强情だつた。
芳子。私は二人の女中を一人にして、その一人の仕事を自分に引受けてまでも、是非是非あの方に來て頂きたいと申しました。
猛。それも最初は、退院後のみどりを見て貰ひたいからと云ふことだつたね。
芳子。だけど後には、あの子と私と、二人の家庭敎師としても必要な方だと思ひましたもの。
猛。だが、然う云ふ役目は美智子さんも、あまり易々と引受けなかつたね。
芳子。それを無理矢理御願ひして、無理矢理お引留めしたのです――ですから、みんな、みんな私の我儘ですわ。
猛。然う云へば然うだがね。
芳子。ですから、あの方に來て頂いてゐるのを、貴郎御自身の思付きかなんぞのやうなことは、どうか仰しやらないで下さいな。
猛。いや、それはまあどつちにしても可い。兎に角、あの人が宅へ來てからのお前は、それまでのお前とちがつた人間になつた。元來が苦勞性なお前は、あまりに諦めがよ過ぎるやうになつた。元來が謙遜な性質のお前は、あまりに自分をつまらなく思ひ過ぎるやうになつた。（短き間）そしてお前は、近頃のお前は、用もない事に我慢をする、無益の克己をやつてゐる。他の點では何一つ俺に逆つたことのないお前が、お前自身を苦めるやうな事になると、不思議なほど强情になつて來る。
（猛、口をつぐんで芳子を見る。芳子は、俯いて、默つてゐる。）
お前が斯うなつたのは、矢張あの人の爲めかしら？　美智子さんが一緒にゐるからかしら？（短き間）ねえ、どう思ふ？
芳子。（判然と）そんな事――美智子さんが一緒にいらつしやるからだなぞとは思ひませんわ！　決して思ひませんわ！
猛。決して思はない？
芳子。ええ。だつて、あの方が側にゐて下さる時には、私もしつかりしてゐるんですもの。貴郎に御心配かけるやうなことを言ひ出したりなんかしませんもの。
猛。それや然うだが――
芳子。そして、どんなに心細い事考へてゐる時でも、あの方の御聲が玄關口にでも聞えて來ると、直ぐにしやんとするんですもの。
猛。だが、然うして、しやんとしたお前が、その後でつまらない事を考へる時には、前のきりよりも一層つまらない事を考へるんだからな。
芳子。（太息を吐き）それは然うね。
猛。ぢや、結局お前のヒステリイは――たしかにヒステリイなんだ――お前のヒステリイは、だんだん甚くなつて行くばつかしぢやないか！
（二人とも少時の沈默。）
芳子。本當に、どうすればいいんでせうねえ。
猛。どうすると云つて――
芳子。でも貴郎、美智子さんと――あの方と御一緒にゐられなくなるのはいやですよ。
猛。どうしてもいやだと云ふのかい？
芳子。ええ。（短き間）斯うして美智子さんにゐて頂いてるのを、貴郎の落度でもあるやうなこと、――そんなことを誰かが言つたので

せうか？

猛。（曖昧に）そんな事はまあ。

芳子。萬一然うだつたら、本當に惡いわ！　貴郎の御顔にかかはるやうなことをして！

猛。つまらない世間の人の、思つたり言つたりすることなんぞ、どうでも可いぢやないか。（短き間）ただね、お前の爲めに‥‥

芳子。私の爲めに？

猛。然うだ、お前の爲めを思つてね‥‥

芳子。私の爲めを思つて下さるのなら、どうぞね、いつまでも、いつまでもあの方にゐて貰つて下さいな。私は全く、あの方にゐて頂かなくちや駄目なんですから。（涙聲になりて）駄目なんですから‥‥

（猛、椅子にもたれ、組合はした兩手の上に顎をのせ、ぢつと考へ込んでゐる。二人とも、かなり久しき間沈默。）

（起ちて スリッパを穿き、大窓の方へ歩き出しながら）またつまらない事を申しましたのね。もう、御仕事に御掛りになるところだつたでせうね？

猛。いや。まだ可い。もう少し話をしようよ。

芳子。（窓の外をのぞき）まあ、善く散ること！見てゐる中にも、みんなになつてしまひさうですね。あら！　あんなに。廊下の上も白くなつて來ましたわ！

（猛、起ち上り、正面の扉をあけて外廊へ出る。芳子も内から窓の玻璃戸を開く。）

猛。うむ。これや斯うして踏みつけるのが惜しいやうだ。舊い趣味だが、今晩はひとつ、あの石燈籠に灯でも入れて見るかな。

芳子。よござんすね。あの石燈籠に灯が點つてゐて、其灯影にちらちらと花吹雪してゐたら‥美智子さんも歸つて來て、きつと面白がりますね——きつと。

（猛、芳子の調子づきたるに不安げに見守つてゐたが、芳子もぴたりと口をつぐんでしまふ。しばらくの間二人とも無言。）

ねえ、貴郎！

猛。（やさしく）何だい？

芳子。耶蘇の方でも、基督敎の方でも、石碑は建てるんですわねえ？

猛。石碑？

芳子。ええ。石碑だけは建てて貰へるんですわねえ？

猛。また、下らない事を言ひ出しさうだね。（强ひて笑ひながら）石碑の註文なんか、少し早過ぎるぢやないかね。

芳子。でも私は、死んだら矢張佛様になりたいわ！

猛。死んだら、どうせ佛様さ。（笑ふ。）

芳子。でも私は、もし出來るなら、基督敎でなくお葬式を出して頂きたいんですから。

猛。さうまで耶蘇嫌ひだとも思はなかつたのにね。

芳子。それや、他の事では然うまで嫌ひぢやありませんわ。だつて以前は貴郎も、お祖母様と同じやうな、熱心な耶蘇だつたと仰しやるし、今でも基督敎の敎其物は、立派なものだと仰しやつてゐるんですもの。

猛。然うだ。俺は今でもクリスティアンだ。むかしよりも一層クリスティアンだと思つてゐる。

芳子。さう仰しやつてゐるのに‥‥我儘のやうですけれど——

猛。どうしても佛葬にしてくれといふのかい？

芳子。だつて、耶蘇の方では、死んでしまつた人間のことなんか、あんまり頓着しないやうに思へるんですもの。

猛。それはさうかも知れないね。

芳子。そして死ぬと直ぐ、忘れられてしまふの

は悲しいわ！

猛。（芳子の涙を流してゐるのを認めて）何だ！　泣いてるのかい？

（猛、再び書齋にはひる。芳子は窓がまちに身を投げて泣いじやくりしてゐる。二人とも少時の間無言。）

芳子。（面を上げて、けれども窓の方へ向いたまま）それからねえ、もう一つ我儘を言はして下さいな。ねえ、貴郎！

猛。何だい？　もう一つの我儘つて云ふのは。

芳子。佛葬にする爲め、宅の墓地へ埋めて頂くことが出來なかつたら、何處でもいいから……晴やかな、塔の見える處へ墓地を拵へて下さいな。

猛。晴やかな、塔の見える處？

芳子。ええ。生きてる中、あんまり陰氣な人間でしたから。

猛。塔の見える處と云ふのはどうしたんだい？

芳子。（猛の方へ振り向きながら）貴郎、人柱の話を御聽きになつたことがあるでせうか？

猛。人柱か？——塔だとか橋だとか云ふ物の土臺の下へ、女が生きながらはひるといふ奴だらう。

芳子。私、小さい時分に誰からかあの話をきいて、本當に恐ろしいと思ひましたの。

猛。うむ。恐ろしい話だね。

芳子。だけど、其恐ろしい話を思ひ出させる塔を、何故ですか私は、好きで好きで仕樣がないのです。

猛。それで、墓地からも塔が見えるやうにと云ふのだな。

芳子。ええ。我儘な御願ひですけれど。

猛。うむ。晴やかな、塔の見える處は俺も好きだ。俺の墓地にも好いよ。（短き間）だが、もう此位でよからうぜ——こんな話は。

芳子。だけど私、本當は死にたくないんですよ。

猛。それは然うだらう。それが本當だもの。

芳子。せめて、もう四五年がところは、どうしても生きてゐたいんですわ。矢張、みどりが可哀さうですから！

猛　今から死なれてたまるものか。

芳子。でもねえ、悲しいんですよ。

猛。何が？

芳子。こんなに死にたくないのに死んで行くのかと思ふと！

猛。復かい？

芳子。だつて、何だか死にさうなんですもの！　死にたくないのに死にさうなんですもの！　みどりや貴郎の御顏を見てると、どうしたのか、涙が胸元へ込み上げて來るんですもの！

猛。もう止してくれ。馬鹿馬鹿しいと思ひながらも、今日は俺までが悲しくなる。

（少時の間二人とも無言。一人の女中が右側の扉をあけてはひる。）

女中。麻布の奥樣が御見えになりました。

芳子。お祖母樣が？　あゝ然う。

（女中去る。芳子、迎へに出ようとしてゐるところへ民子入り來る。）

いらつしやいまし。

民子。御無沙汰しました。御變りもありませんか？

猛。リョウマチは如何です？

民子。（芳子のすすめる椅子にかけながら）大きに快い方なの。みどりは？

芳子。先刻活動へ行きましたの。

民子。然うですか。何方と？

芳子。（恐る恐る告白するやうに）あの、美智子さんと御一緒に。

民子。（芳子と猛との顏を見比べながら）あの人と！　然うですか。

（三人とも暫く無言。芳子、出て行く。）

(芳子の姿の見えなくなつた時、椅子を猛の方へ寄せながら)顏色が好くないねえ。

猛。誰がです？

民子。芳さんがさ。

猛。然うでせうか。

民子。だんだんと惡くなりさうだよ。それに何か面白くないお話でもおしなのかい？

猛。(一寸狼狽しながら)別に、さう――

民子。だつて、目の縁を赤くしておいでぢやないか？――芳さんが。

猛。近頃、折々つまらない事を云ひ出して困るんです。

民子。つまらない事つて、どんな？

猛。なあに、全く他愛のない――矢張ヒステリイでせうよ。

民子。それで――あの人は、美智子さんはどうなんだい？

猛。美智子さんがですか？

民子。ああ。あの人はもう此處の内の人になつてしまつたんだね？

猛。まあ、然うです。

民子。妙な人だねえ――あの人も。

猛。如何してです？

民子。だつて、一體に、する事が腑に落ちないぢやないかね。(短き間)以前ああして、突然に家を出てしまつたのも何だし、今度久し振りに會つたつて、ただ『申譯もありません』とか『面目次第もありません』とかを繰返すばかしで、事情は今以て分らないでせう。

(猛、苦しき沈默を守つてゐる。)

それに、此方に斯うしてゐながら、私達の方へ、ただの一度も足踏みもしないと云ふのは、いくら何だつて――

猛。いや、それも大變濟まない事のやうに、始終思つてゐるやうですよ。

民子。貴方は然うして兎角に辯護をしたがるけれど、あの人はたしかに人間が變つて來てゐます。私達と一緒にゐた時分のやうぢやありません。

猛。それや、然うでせう。十年近くの間には、どんな子供でも、どれだけか大人になりますからね。

民子。ところが、あれは大人になつたのぢやなくて、墮落したのです。

猛。(笑ひながら)又お母さんの『墮落』ですか。

民子。然うです、たしかに墮落です。でなければ、他の事は措いて、芳さんがあんなになつて來るのに平氣で――

猛。平氣で、どうなんです？

民子。ああしてゐられるものぢやありませんよ。

猛。解りました。美智子さんが宅にゐるのはいけないと仰しやるんですね？

民子。いけないどころの話ぢやないね。

猛。然うでせうか？

民子。然うですとも。芳さんの實家の人達は今こちらにゐないし、萬一の事があつたら私達の責任だからね。

(猛、返事をしかけて止める。)

それに世間からもう、何とか云はれてるかも知れないつてね、御父樣は、第一に其點を心配していらつしやるんだよ。

猛。御父樣はいつでも然うです。あの人の心配するのは、世間體といふことばつかしです。

民子。それはね、世間體ばつかしの事なら、御父樣は兎に角、私はそれほど氣にしないけども……萬一事實が……

猛。事實つて何です？

民子。私は何にも知らないんだけども、先刻言つたやうに、芳さんがあんなになつて來てゐるのに、美智子さんが平氣で、ああしてゐるのはあんまりだね。

猛。お母さん、待つて下さい。貴女は美智子さんの立場を誤解していらつしやる！
民子。どうして？
猛。どうしてと云つて、あの人は無理矢理引張つて來られたんです。そして引き留められてゐるんです。
民子。引張つて來られて、そして引き留められてゐるんだつて？
猛。然うです。實際の事實が然うなんです。
民子。まあ！ よくそんな事を御言ひだね――いくらあの人を辯護したいからと云つて！
猛。私はただ事實を言つてゐるだけです。
民子。では貴方は、美智子さんを引き留めてゐるといふ責任を、自分一人に引受ける氣なんだね？
猛。お母さん、貴女はまだ、感違ひしていらつしやる！
民子。どうして？
猛。あの人を引きとめてゐるのは芳子です。私よりも芳子なんです。
民子。えッ！ 芳さん？ 芳さんが自分で？
猛。然うなんです。
（民子、頭をかしげて考へ込む。二人とも暫く無言。）
民子。（前と調子を變へて）貴方は子供の中から譃を言はない人だから……何だか話が分らなくなつて來ました。（短き間）でも猛、芳さんはあの人にゐて貰ひたいつて、口で然う云ふだけぢやないのかい？
猛。いいえ。然うぢやありません。
民子。ぢや、貴方があの人にゐて貰ひたいだらうと思つて、然う云ふんぢやないかしら？――あの人は、どちらかと云ふとそんな氣質のやうだから。（短き間）どつちにしても、貴方自身はあの人を引き留める氣はないと御言ひなんだねえ？
猛。（狼狽して）兎に角私は、美智子さんと一緒にゐちやいけないだらうと云つてるんですが……
民子。芳さん自身がどうしてもといふんだね？
猛。まあ然うです。
民子。呑み込めない話だねえ。（短き間）一體、どうして斯うだらう？――美智子さんと云ふ人の周圍には、いつでもこんな、腑に落ちないやうな事件ばつかし起るんだが！
猛。（强ひて笑ひながら）悪魔でも憑いてるんですよ！
民子。（身體をふるはしながら）貴方はじやうだんにそんな事を御言ひだけども！
（此時芳子、扉をあけてはひる。民子も猛もそちらへ振りむく。）
芳子。長谷部さんがいらつしやいましたが……
猛。長谷部？ 東京新聞の？
芳子。ええ。
猛。こちらへ御通しよ。格別の用事でもないだらうから。
民子。（起ち上りながら）私は、芳さんに話があるから、あちらへ行きます。
猛。然うですか？ それぢや後でまたいらつしやい。
（民子、芳子と共に出て行く。しばらくして長谷部三郎の靴音が外廊の上に響く。）
長谷部。（室からのぞき）先生、お邪魔してもいいですか？
猛。（煙草をくはへた儘）ああ、はひり給へ。
長谷部。（室内へはひり、背に扉をしめて）お不在でなければいいがと氣遣ひながら來ました。（默つて頭を下げてのち）まづ、安神しましたよ。
猛。（近くの椅子を指さしすすめながら）ひどく又心配したものだねえ――僕なんかゐてもゐなくつても、大したことはないぢやない

か？

長谷部。（一寸考へて）先生、からかつちやいけませんよ。

猛。からかふ？

長谷部。美智子さんの事でせう？

猛。美智子さんの事？　君が美智子さんをどうしたんだい？

長谷部。どうか、も少し御手柔らかに願ひたいものですね。（頭をかきながら）然う云ふわけぢやないんですから。

猛。然う云ふわけぢやない？

長谷部。だつて、私も昔から知つてる人なんですから。

猛。だから如何だと云ふんだ？

長谷部。困るなあ！　別に私が、あの人の後を追駈けてゐると云ふやうなわけぢやないのですよ。

猛。（初めて氣が附いたやうに、そして沈鬱な調子で）然うか！

（猛、吸殼を灰皿に押しつけながら、默つて長谷部の顏を見てゐる。）

長谷部。（同じく初めて氣が附いたやうに）先生は別に、そんな意味で仰しやつたのぢやないですか？　（舌打ちして）つまらない事を喋つたなあ！

猛。（苦笑しながら）兎に角、美智子さんは生憎とゐないね。

長谷部。全く然う云ふわけぢやないんです。近頃ちよくちよく伺ふのも、決してそんな……

猛。（面倒さうに）まあ、どうでもいいぢやないか。

長谷部。それに、今日は本當に用事があるんです――大切な用事が！

猛。大切な用事が？　僕にかい？

長谷部。然うです。

猛。何だか本當らしいな。新聞社の方に關係のある用事かい？

長谷部。まあ、然うです。

猛。談話の筆記を取られるのなら御免だぜ。近頃あれ位嫌ひな事はないからな。

長谷部。（顎を撫でながら）今日は、手前の方から御願ひするやうな用事ぢやないんです。

猛。（笑ひながら）へえ！　ぢや、僕から御願ひするやうな用事があるんだね？　兎に角、承つて見ようよ。

長谷部。（ポケットから一枚の紙片を取り出して、猛の前に置き）これを一つ讀んで見て下さい！

猛。何だい？　新聞の校正刷ぢやないか。

長谷部。さうです。それを一つ讀んで見て下さい！

猛。（校正刷を取り上げ、一瞥すると共に絶叫する如く）何だ！『禽獸の如き大學教授！』

長谷部。（椅子から起つて、校正刷をのぞき込むやうにしながら）其下に割註がはひつて、『朝川猛氏の家庭の亂脈』とあつた筈です。

猛。うむ。

（猛、默つて讀む。長谷部も少時の間沈默。）

長谷部。（校正刷の上を鉛筆のさきで突き）これは、『看護婦上りの怪しげなる女を』の誤植です。

猛。ふむ。

長谷部。それから其次ぎのは、『妻妾室を同じうし』でしたらう。

猛。これは『發狂』か？

長谷部。さうです、『發狂したる夫人は』です。

（猛、また默つて讀みつづける。長谷部も椅子にかけて、煙草に火を點ずる。）

猛。（讀み終りたる校正刷を靜かにテエブルの上に置き）一體これは何だ？

長谷部。投書として來たのです。其投書を材料

にして書かれた記事なんです。

猛。そしてそれが君の處の新聞に出ると云ふのか？

長谷部。然うです。私の出社がもう一足おくれたら、どうにもならなかつたと思ひます。いや、全く際どいところでした。

猛。ふむ。（腕組みして考へ込む。）

長谷部。斯う云ふ杜撰なことを書くなんて、全く亂暴な話なんですけれども、何しろどうも、近頃のやうに材料がなくなつて來るとついその・・・

（猛、依然として沈默、再び校正刷を取り上げて見てゐる。）

でも先生、差當つて、明日のに組み込むことだけは禁めて置きましたから。

（猛、一寸面を上げて長谷部を見ただけで、またもや校正刷に目を注ぐ。）

それに何ですよ。先生がどんなにしてでも此記事の掲載を食ひ止めて貰ひたいと云ふ御希望ならば、私も出來るだけの力を盡して見ませうよ。（短き間）そして何とか成らないこともなからうと思ひます。（猛の落ちつき方を齒がゆがるやうに）だが、先生は・・・別に食ひとめてほしいと云ふ御考もないですか？

猛。（校正刷を卓へ置き）うむ、そんな事はどうでも可い！・・・どうでも可い問題だ！

長谷部。えッ！　どうでも可い問題だと仰しやるんですか？

猛。然うだ。

長谷部。へえ！

猛。新聞は譃を書くときまつたものだ！（短き間）新聞に出て居れば、本當の事でも譃のやうな氣がする！

長谷部。しかし、結果を・・・譃でも本當でも、新聞に書かれた結果を考へたら！

猛。新聞に書かれた結果か？　僕もこれまで他の方面の事では、かなりに譃を書いて貰つた經驗がある！

長谷部。そして？

猛。大抵の人にみな似たり寄つたりの經驗がある筈だ。

長谷部。だから、本當にされる氣遣ひはないと仰しやるんですね？

猛。さうだ。新聞記事は、どこまでも單だ新聞記事として受取られるばかしだ。

長谷部。だからどうでも可い問題だと仰しやるんですね。

猛。さうだ。そんな事はまあどうでも可いが、僕にはもつと重大な問題がある！

長谷部。もつと重大な問題が？

猛。うむ。其方で僕は、君の好意を受けたいと思ふ。

長谷部。何です？――それは。先生が僕の好意を受けたいと仰しやるのは、一體どう云ふ事なんです？

猛。僕はね、新聞の譃は其儘にして置いても可いが、君からは本當の事が聞きたいんだ。

長谷部。（一寸氣味惡く感じながら）えッ！　僕から本當の事を？

猛。うむ。君は（校正刷を指さし）これを投書だと云つたねえ？

長谷部。はあ、投書です。投書が土臺になつてるんです。

猛。先づ第一に、それが譃だと言つて貰ひたいね。

長谷部。だつて、投書なんですから――實際。

猛。ただの投書とはどうしても考へられないんだ。（短き間）勿論僕は、僕の爲めに苦しい告白をしてくれる君に、何等の報酬もせずにしまふ氣はないよ。

長谷部。いくら報酬を頂いたところで・・・とに

かく困りますねえ。
猛。長谷部君、僕は君の性格の殆んど全部を知つてゐる。だから、君にして、當の事を話してくれるなら、この記事の掲載中止に盡力して貰ふより以上に、謝意を表したいと思つてゐる。
長谷部。困つたなあ？
猛。別に困ることはない。君はただ、僕に對して好意をもつてくれさへすればいい。
長谷部。(舌打ちして獨白のやうに)ええ、言つちまへ！　全く、投書ぢやありません。
猛。然うだらう。(短き間)ぢや、どうしたんだ？
長谷部。實はある人から頼まれたのです。
猛。頼まれた？　あんな記事をかいてくれと？
長谷部。さうです。
猛。ふむ。そして或る人といふのは誰だ？
長谷部。(頭をかきながら)そいつはどうも……
猛。言ひにくいと云ふのかい？
長谷部。何しろ、絶對に祕密にするといふ約束でしたからな。
猛。成程。だが、君にとつてそれほど言ひにくい事柄は、此場合僕にとつても聞かずにゐられない事柄なんだらう。(短き間)僕は今一度、君の好意に依頼する！
長谷部。(卓に兩手をかけて暫く考へ込んでゐた後)いや、他ならぬ先生の事です。そして然うまで仰しやつて下さることですから、思ひ切つて言つてしまひます。
猛。うむ、言つてくれたまへ。頼む。
長谷部。實はねえ、先生、この記事を書いて呉れと頼まれたとき、いくら私でも、金錢上の報酬といふやうなことばかし目的には、引受けられるものぢやありません。それだけは理解して下さるでせうね？
猛。うむ、理解する。
長谷部。實はお恥かしい話ですが、私はあの記事の結果として、先生と……美智子さんとの間が遠くなることを希望したのです。
猛。ふうむ。
長谷部。引受ける際には然う云ふ心持も働いて、兎に角引受けたのですが、さて引受けたあとでは——
猛。引受けたあとでは、どうした？
長谷部。第一、斯うして始終御厄介になつてゐる先生に對して、あんまり申譯のない事だと思ひ返しました。
猛。それから？
長谷部。それから第二に、先生から遠くなる美智子さんは、畢竟この私からも遠くなるのだと云ふことに氣がついたのです。
猛　成程ね。
長谷部。それからこれは、一層お恥かしい話ですが、引受けた仕事をふいにしてしまふ場合、この校正刷をこちらへ持ち込んで、先生に御買上げを願つたら格別損は行くまいと考へたのです。
猛。へえ！
長谷部。つまり先生の方が、お金に綺麗でいらつしやるからです。
猛。僕が！　(短き間)ぢや君、誰だ？　僕ほどお金に綺麗でない奴といふのは、一體誰なんだい？
長谷部。いいや、やつぱしどうも、申し上げにくいんですけども……
猛。思ひ切りが惡いな——君も。
長谷部。(坐つた儘椅子をあとへ引いて)實は……麻布の先生です！　先生の御父樣から頼まれました！
猛。(愕然として起ち上り)何だ！　(短き間)親爺？　僕の親爺から？
長谷部。然うです。理由は、先生や美智子さん

に反省を促したいからと云ふことでした。

猛。（長谷部の言葉を耳にも入れず）あの、僕の親爺が！　あれ程、世間體を氣にする親爺が、僕達の世間體を自分から壞しにかかる！　殆んど有り得べからざる事だ！

長谷部。（愕然として起ち）先生は、譃だと仰しやるんですか？　私がいい加減な事を言ふと仰しやるんですか？

猛。（長谷部に何の頓着もせず）兎に角、親爺に會つて來る！

（猛、血相を變へて外廊へ飛び出してしまふ。長谷部はその後に倒れた椅子を起して、それにつかまりながら暫く考へてゐたが、やつと分別が着いたかの如く、猛のあとを追うて出る。間もなく右側の扉をあけて、民子と芳子とが入つて來る。）

民子。どうしたんだらう？　あんな大きな聲を張り上げて！

芳子。（窓からのぞいて見て）あら！　御一緒に御出掛けになつたのかしら？――あの儘で。

民子。猛も出たのかねえ――私はまだ話があつたのに。

芳子。（バタバタと卓へ駈け寄り、其上に置き忘れてあつた校正刷を取り上げ）何でせう？――これは。

（芳子、稍や暗くなりかかつた窓からの光にすかし、讀んでゐる中に手先きが、やがて體全體がわなわなと震へて來る。）

民子。（芳子の樣子を不審に思ひ、近づいて見て）新聞の號外？

芳子。（片手に額を押へ、片手に持つてゐた校正刷を前へ差出しながら）御母さん！　駄目です！

（民子、受取りて讀まうとする。氣が附いて、電燈をひねつて明るくする。此時芳子はふらふらと寝椅子へ近づき、倒れるやうに身を投げる。）

民子。『禽獸の如き大學敎授！』（更に老眼鏡に手をやつて）『朝川猛――氏の家庭の……』

（民子、其あとを默讀。）

（讀み了りて）まあ！　どうしたと云ふんだらうねえ。（太息をつき）たらとこんな事を、新聞に出されてしまつて！

芳子。（泣いじやくりしながら）たらと、こんな取返しのつかない事をしてしまつて！

民子。全く取返しがつかないねえ！

芳子。（半ば身を起し）御母樣、何とも申譯がございません。みんな私が惡いのです。

民子。えッ！　芳さんが惡い？

芳子。ええ、私が行き屆かないからです。（短き間）御母樣、どうかみどりの事……それから猛さんの事も御願ひします！

民子。芳さん、貴女は何と御言ひなの？

芳子。（判然と）私はもう生きてはゐられませんから！

民子。まあどうしてそんな事？（短き間）何も芳さんが惡いから、斯うなつたと云ふわけぢやないでせう。

芳子。いいえ、私がつまらない我儘を通したからです。でなくとも、こんな事が新聞なんかに出て見れば、ただそれだけでも私は……

民子。ただそれだけでも、芳さんはどうなるの？

芳子。それは、私が書いたと同然ですもの！

民子。芳さんが書いたと同然だつて？　貴女はどうして又、そんな事を御言ひなの！

芳子。だつて御母樣、世間の人達はきつと、私が書かしたと思ひます、私が投書でもしたと思ひます！

民子。まさか、何が何でも。私達一家の者の、さうです、芳さん自身の不名譽にもなる事柄

だものね。
芳子。いいえ、きつと然う思ひます。猛さんだつて、然う思ひます。
民子。猛だつて、芳さんのした事と思ふ？
芳子。ええ。然う思ふと私もう――
民子。困つたねえ。
芳子。それに私、猛さんよりも誰よりも、あの方に、美智子さんに然う思はれるのが……然うです、私はもう生きちやゐられませんわ！
民子。本當に困つたねえ。（暫く椅子の上に思案した後）然うだ、新聞社の方へきいて見ましよ。
（民子、起ちて舞臺左側の扉をあけ、電話室へはひる。交換手の間違、お話中等にて電話容易に通ずるに至らず。其間に舞臺にては、芳子、ふらふらと又寢椅子から起ち上り、頸垂れて、とぼとぼと舞臺の中程近くまで踏み出し、ぴたりと足を留める。それから頭を擧げて周圍を見廻してゐる中、不意に何事かを思ひ浮べたるらしく、風の如く右の扉から出て行つてしまふ。）
（やつと電話が通じて）もしもし――編輯のねえ――長谷部さんはゐませんか？　ええ、長谷部さん。（短き間）ああ、然うですか。それぢやねえ――何方でもよござんすからねえ――『禽獸の如き、大學教授』といふ記事のことについてね――一寸御尋ねしたいんですが。
（此時、猛の父正輝、第一幕の時と同じく牧師らしき服裝にて、外廊からはひつて來る。背に扉をしめたとき、民子の電話をかけてゐる聲が耳に入り、其儘立ちすくんでしまふ。）
あ、然うですか。あの記事のこと御解りになる方――何方もいらつしやらない？　然うですか。御邪魔でした。さよなら。（扉をあけて舞臺へ出で）ほんとに仕樣ないねえ――誰もゐないんだつて！（正輝の突立つてゐるのを見て）おや！　貴郎ですか？
（正輝、無言の儘二歩三歩踏み出して、また立ち止まる。）
貴郎！　大變ですよ！（正輝が依然として沈默せる故に苛立ちながら）まあ、これを見て御覽なさい。
（正輝、器械的に例の校正刷を受取り、それを讀むやうな眞似をする。）
そこぢや灯が駄目でせう。
（正輝を卓の側へ引張つて來て椅子にかけさせる。）
正輝。（讀み了つたやうな樣子をして）うむ。
民子。一體どうしたと云ふんでせう？
正輝。うむ。なには、長谷部は先刻此處へ來たらうな？
民子。ええ。長谷部さんのやうですよ――それを持つて來たのは！
正輝。お前は會はなかつたのかい？
民子。私は會ひませんが、猛は會ひました。
正輝。さうか。猛は會つたか？
民子。そして大きな聲を張上げて、二人で一緒に飛び出して行きました。
正輝。さうか。（獨白のやうに）もう追掛けて見ても駄目かな。
民子。とにかく困つた事になりましたねえ。芳子は先刻からもう、死んでしまふなんぞと言ひ出すし――
正輝。（椅子から半ば跳び立ちさうに）なに？　芳子が死ぬ？
民子。ええ。生きちやゐられないと云ふんです。自分が投書したも同然だからつて！
正輝。ふうむ。芳子がそんな事を言つたのか？

民子。ええ。

（二人とも暫く無言。正輝はぢつと考へ込んでゐる。）

何か私達に恨みでも有つてる人が、意趣返しにしたとでも云ふのでせうか？（正輝が尙ほ無言の儘にゐるのを見て、急に聲を落して）いゝえ、もつとも世の中には案外な事があるものですからね。

正輝。（目を閉ぢた儘の顏を上げて）然うだ。案外な事があるものだ！

民子。念の爲め、芳子を此處へ呼んで來て見ませうか？

正輝。いや、それにも及ぶまい。

民子。でも……

（民子、右側の扉から出て行く。あとで正輝は、[illegible]の校正刷の紙をべりべりと破つてゐたが、破り終つたとき、起ち上つて民子の後を追はうとする。扉の處まで行つて引き返し、正面の扉の方へ駈け出さうとしたが、外廊に靴音をきいて思ひ止まる。）

猛。（足音荒く飛び込んで來て、正輝とすれすれになるほど近づき）いゝによく逃げ出さないでゐましたね？

（正輝、默つて後退りし、椅子にかける。）

貴方は自分のした事を、自分がしたと告白してくれますか？ 立派に？

正輝。何を――何を告白するんだい？

猛。（苦しげに）貴方も、色々な事をしていらつしやる。（短き間）だが、此場合舊い事は問はない。私も問ひたくない。

（正輝、ぢつと猛の顏を見つめてゐる。）

切めて、此場合の問題について、立派に告白して下さい。耶蘇教仲間ではあまり使はない言葉だが、せめて男らしく自分がしたと告白して下さい。

正輝。お前の言ふことは、よく解らん。

猛。（體を震はせながら）よく解らん！（短き間）いや、宜しい。此上を强ひますまい。貴方の顏色が――その、わなゝいてゐる脚が、何よりも正直に告白してくれました。（正輝の横の椅子にかけ、稍やセンティメンタルな調子で）だが、私は殘念です――貴方の口から告白して貰へないのは殘念です！ 自分の父を、斯うまで淺間しい人間として目の前に見るのは！

（二人とも暫く無言。隣室の方からばたばたと人の駈け寄る音。二人とも目を上げて見る。）

民子。（扉をあけたまゝにして置いて入り）芳子は何處へ行つたか見えないんですよ。おや、猛も御歸りかい？ 大變な事になつてしまつたねえ！

（猛も、正輝も默つてゐる。）

（正輝の方へ）ねえ、矢張あれがしたんですかねえ？ そして良心に責められて――

猛。御母さん、良心つて誰の事です？ 誰の良心の事です？

民子。いいえねえ、世の中は案外なものですからね。

猛。何が案外なものです？

民子。芳子はね、先刻自分から、生きちやゐられないつて言つたんですよ。

猛。芳子が？ 芳子がそんな事を――なぜです？

民子。自分がしたのも同然だつて！

猛。自分がしたのも同然だつて？ あの芳子が言つたのですか？

民子。矢張良心に責められたんだねえ。

猛。そして家にゐないんですか？

民子。いゝえ、みんなにも搜さして見たが、何處へ行つたか分らないんだよ。

猛。（突如突立つて）可哀想な事をした！（短き間）あいつは、きつと死んでゐる！ 芳子はきつと死んでゐる？ （幕）

第三幕

（第二幕の時より半歳ばかりを經過して、十月の末頃。生前芳子の希望したる如き、遠見に五重の塔の見える晴やかな、新しき墓地。よその墓地との間を劃る常盤木の垣根。處々に楓、櫨、葛などの紅葉したのが、午後の日光を受けて燃え立つてゐる。美智子、片手に白き花を持ち、片手にみどりの手を引きながら、左手から出て來る。其あとから墓番が阿伽桶お線香なぞ持つて出て來る。）

美智子。（紅くなつた木の葉を見上げて）佳い色になつたのね！ たつた一週間の内に。

墓番。もう火曜日でございますかねえ――私共はみんな舊弊なもんですから、ついこの何曜といふやうなことは分りませんですが。

みどり。（美智子の手を離れて後へ振り返り）宅の母さんはね、火曜日に亡くなつたんだつて。

墓番。へえ！ 御孃樣はよく御存じでいらつしやいますな。

みどり。だから、いつでも火曜日に、斯うして小母さんと御參りするの。

（此時既に美智子は柵門を開いて内へ入り、芳子の墓標の前に立つてゐる。）

美智子。（墓番を顧みて）どうも憚りさま。そこへ置いて頂けばいいんですから。

墓番。それではあとで、また取りに參りませう。

（墓番の男、もと出て來た方へ引き込む。）

美智子。（花筒に花を立てながら）みどりさん、貴女も。

みどり。（分けて貰つた花を立てながら）これは菊の花？

美智子。ええ、然うよ。

みどり。菊の花も、母さんが好きだつたの？

美智子。いいえ。生憎と今はねえ、母さんの御好きな花といふのがないんですよ。さ、今度は御線香よ。

みどり。（線香も立てながら）今度は御線香。（やがて、水を注ぎかけ）それから御水ね！

（美智子、默つて合掌してゐる。美智子の起ち上つた時、みどり、その前へ出て手を合せる。美智子、あとへしざり、脇へ向き、ハンケチで目を拭ふ。）

（美智子の袂につかまり）小母さん、もう可いのね。濟んだのね。

美智子。（ふり向いて、みどりの髪の毛を撫でながら）お可哀想ね！ 貴女も。

みどり。どうして？

美智子。今から、御母樣を失くしてしまつて、本當にお可哀想ね！

みどり。いいわよ、小母さん。母さんが失くなつたつていいわよ！

美智子。まあ！

みどり。だつて、小母さんが母さんになつて呉れるんだから！

美智子。（愕然として）えッ！ （短き間）誰がそんなことを云つたの？

みどり。みんな然う言つてるわ！――小母さんが、あたしの母さんに成つてくれるんだつて！

美智子。然う。然うですか。みんなが！

みどり。母さんも然う言つたわ！

美智子。（再び愕然として）まあ、御母樣が？ （短き間）御母樣が何時そんな事？

みどり。何時だか、小母さんのゐない時、そし

て御父様も御留守の時よ。
美智子。まあ！
みどり。母さんはねえ、さう言つたの――母さんが亡くなつたら、御父様と、小母様と、三人で大きくお成んなさいつて。それからね――小母さんの仰しやること、何でも聴かなくちやいけないんだつて。
美智子。まあ！　然うですか！
みどり。それからね、母さんは泣いたの。
（美智子の沈鬱になつて來たのを、子供心にも氣付きて、みどりも口をつぐむ。やがて長谷部三郎、右手から出て來る。）
あら、新聞の長谷部さんがまた來たわ！
長谷部。（近づきて）みどりさん、今日は。
（斯く言ひながら美智子の方へ目禮する。美智子も目禮を返す。）
（墓標の前に一寸額づいたあと、美智子の方へ向ひ）感心によくお參りをしてお上げになりますね。
美智子。（煩ささうに）ええ。貴方もね。
長谷部。僕も？
美智子。貴方も近頃は、私達と同じ日に、缺かさず御參りになるぢやありませんか？
長谷部。僕も近頃、序と云つちや濟まないですが、折々用事でこちらへ廻るものですからね。
美智子。（長谷部に取り合はず、みどりの手を引いて行かうとしながら）さ、みどりさん、ぼつぼつ歸りかけませうね。
長谷部。（稍や強く）美智子さん！
美智子。（ふり返りて）何ですか？
長谷部。だいぶ噂が高く成りましたねえ。
美智子。噂が？　何の噂がですか？
長谷部。貴女がた御二人のだつて事は、分つてるぢやありませんか。
美智子。然うですか。
長谷部。とにかく高まりましたねえ。
美智子。貴方が高めて呉れたんですか？
長谷部。飛んでもない事です。僕はそんな人間ぢやありませんよ。
美智子。さうですか。若し何だつたら、御禮を言はうと思つたんですけども。
長谷部。そんな事を仰しやる貴女は、貴女がたは、世間から何と云はれても平氣だと仰しやるんですか？
美智子。ええ。私は世間なんぞを恐れませんから。
長谷部。世間なんぞを恐れない？
美智子。ええ。世間に對しては、意地になれる人間です！
（長谷部、口をつぐむ。今迄二人の顔を見比べてゐたみどりの手を引き、美智子、再び行かうとする。）
長谷部。（最後の勇氣をふるつて）美智子さん、一寸待つて下さい。
美智子。（碌々ふり返つて見もせず）なんですか？
長谷部。貴女は、此佛様がどうして亡くなられたか、それを御存じですか？
美智子。（急所を突かれたやうに）え？（振り返つて）奥様がどうしてお亡くなりに成つたかつて？
長谷部。然うです。それを御存じですか？（短き間）御存じがないでせうね？
美智子。何か事情があるんですか？　え？　事情があつたんですか？
長谷部。（門柱に凭りかかりながら）僕は、貴女を不愉快にするつもりで言ふんぢやありません。ただね、聞きたいと仰しやるから申し上げるだけですよ。
みどり。（美智子の顔を見上げて）小母さん、まだお話？

美智子。一寸！ 一寸の間待つて頂戴な。

みどり。そいぢや私、あの花（墓地の外に咲いてゐる何かの花を指さし）を取つてるわ。

美智子。ええ。それがいいでしよ。（長谷部に向ひ）それで奥樣のお亡くなりになつたのは？

長谷部。實は、隨分嚴重に封じられてゐる祕密なんですけども……

美智子。（熱心に）そんな事を仰しやらないで、いゝ、どうか！

長谷部。ぢや敎へて上げますが――第一、あれは、怪我の轢死ぢやなくて――自殺でした。

美智子。まあ！ 自殺？

長谷部。さうです、自殺でした。

美智子。（半ば獨白のやうに）矢張ね！

長谷部。（美智子の言葉を心にも留めず）そして、其自殺には理由があるんです。

美智子。理由が？ 一體、どんな理由が？

長谷部。實はあの時分、僕の社へ妙な投書が舞ひ込んで來たものです。

美智子。妙な投書つてどんな？

長谷部。それは、その、『禽獸の如き大學敎授』と云ふ大見出しでしてね。

美智子。そして？

長谷部。割註に、『朝川猛氏の家庭の亂脈』とあるんです。

美智子。まあ！

長谷部。しかも、其內容たるや全然事實の捏造で――少くとも非常なる誇張でしてね、妻妾室を同じうしとか、夫人が虐待されてるとか、まあ、馬鹿氣きつた物なんです。

美智子。まあ！ そんな事！

長谷部。殊に甚しきは、口を極めて、いや、筆を極めて貴女の人格性行を、讒誣中傷してゐることです。

美智子。それで、どんな人が投書したのか分りませんか？

長谷部。それが全く分らないんです。

美智子。（ぢつと長谷部の顏を見つめながら）一體誰でせうね？ 何の爲めにしたものでせうね？

長谷部。（美智子の視線を逃れるやうにしながら）兎に角、それがもう少しで、本當の記事になつてしまふところでしたよ。

美智子。記事になつて、貴方のとこの新聞に出るんですか？

長谷部。勿論、私が社にゐる以上、そんなへまをやらせることはありませんがね――

美智子。それで其、投書といふのを、猛さんも知つてるんですか？

長谷部。（不安げに）ええ。知つてるんです。先生も見ました。

美智子。そして猛さんは、何と言ひました？ 誰がしたことだらうとも言ひませんでしたか？

長谷部。（周章へて）先生がですか？ （短き間）さうです。先生は妙な事を言つてゐましたよ。

美智子。妙な事？

長谷部。先生は何だか、麻布の先生、あの牧師先生でもやつたんぢやないかしらつてね、そんなことを言つてゐましたよ。

美智子。えツ！ あの人が？

長谷部。まあ、單なる想像に過ぎないだらうと思ひますがね。

（二人とも一寸の間沈默。）

（前の話の續きを思ひ出し）それでです、誰がした惡戲であるかはとにかくとして、それが記事になりかかつてるところを、いやもう活字になりつつあるところを、あの人が見たものです！

美智子。あの人つて？ 奧樣？

長谷部。然うです。それをあの人が見て、急に無分別を起したんですよ。

美智子。その、活字になりかかつてる物を見て？

長谷部。しかも其時、奥さんは變な事を言つたさうですよ――これは私が書いたも同然だから、美智子さんも然う思ふに違ひないつてね。

美智子。まあ！　私が然う思ふ！

長谷部。だから、奥さんは生きちやゐられないんだつてね。

美智子。然うですか！　奥さんがさう仰しやつたんですか！

長谷部。これは麻布の奥さんから、あとで伺つた話です。一體あの時の騷ぎは、先生達親子御三人と、そして僕とだけで、すつかり内緒に片附けてしまつたんですからね。

（美智子、傍の楓の枝につかまりながら、ぢつと考へ込んでゐる。）

（不圖氣がついたやうに）いや、少し喋り過ぎたやうですな。（短き間）僕は、そんなにまで貴女を不愉快にするつもりで言つたのぢやない。ねえ、美智子さん、僕は唯だ、貴女が是非聞きたいと仰しやるから、そしてそれをお話するのは、僕の好意として取つて頂けるだらうと思つたからです。

美智子。（頭を上げて）どうも有難う。

長谷部。いや、さう改まつた御禮には及ばないですがね――

みどり。（今迄默つて遊んでゐたが）小母さん！　あれ、御父樣ぢやない？

（美智子も長谷部も、舞臺の右手へみどりの指さす方を見やる。）

美智子。然うね。あのお帽子の冠りかたは、御父樣らしいのね。

長谷部。（逃げ支度にかかり）僕はそれぢやお先きへ！

美智子。（覺えず微笑して）然うですか。御急ぎですのね。

長谷部。ええ、先生に會ふと、どうしてもお話が長くなりますから。みどりさん、左樣なら。

（長谷部、來たときとは反對の方へこそこそと逃げ出す。）

みどり。（長谷部のあとを見送りながら）あの人、宅の御父樣が恐いのね。

美智子。ええ、さうでしよ。

みどり。小母さんは、御父樣が恐くないでしよ？

美智子。（一寸言ひ淀んだあと）ええ。小母さんは恐くないんですとも。

みどり。あたしも恐くないわ！　御父樣好きだから！　（短き間）まあ、嬉しいこと！　何か、お土産をもつてらつしやるわ！　あたし迎へに行こ。

（みどりの駈け出すあとに、美智子もつづいて柵門から二三歩を出る。猛、學校の歸りらしき服裝にて舞臺右手から出て來る。）

（大きく）お父樣！

猛。ああ、今日は御父樣も來たよ！

美智子。（お辭儀して）學校から直ぐ？

猛。ええ。學校も一時間ばかり早く濟んだので、ふとこつちへ廻つて見る氣になつたんです。

みどり。（父の手にせる紅い花を見て）つまらないわ！――お土産ぢやないんだもの。

猛。（笑ひながら）うむ、これは貴女のお土産ぢやない。（ポケットから紙包を出し）貴女のはここにある。

みどり。小母さん、早く出して頂戴！

美智子。あら！　此處でもう？

（美智子、みどりから受取つた包を解い

てやる。中から出た玩具を、二人で面白く弄んでゐる。その間に猛は、墓標の前に行き、其紅い花を花筒にさし、一寸合掌して脇へ寄り、墓標をぢつと見入つてゐる。)

猛。(やがて其側に置き忘れられたステッキを見付け、手に取上げて)誰だらう?——ここへステッキを忘れて行つてゐる。

美智子。(起ち上り、ふり返りて)長谷部さんでせう。先刻までゐましたから。

猛。長谷部が?

美智子。ええ。近頃よく、お參りしてくれるんですよ。

猛。へえ!

美智子。お參りしてくれるのを、そんな事言つちや惡いけど、隨分煩さいんです。

猛。(うなづきながら)ああ、然うか。(短き間)そして先刻までゐたんだね?

美智子。ええ。猛さんの姿を見て、急に逃げ出したの。

猛。ふむ。(ステッキをもとの處へ突き立てながら)ぢや、此次ぎの火曜にはもう來ないな。

美智子。(俄に陰鬱な調子になりて)ええ。もう來ないでせうね。(短き間)さうです、今日きりでもう——今日がもう一番お仕舞ひのお參りでせうね!

猛。(美智子の餘りに沈み切つた樣子を怪み)美智子さん、どうしたの? どうかしてるぢやないか?

(美智子、一寸面をあげて猛を見、再び首垂れて言葉なし。)

(柵門を出て、美智子に近づき)ねえ、どうしたの? 變ぢやないか?

美智子。(力なげに)私のお參りも、今日がお仕舞ひになりさうですの。

猛。え?

美智子。今度の火曜にはもう、私も此處へ來られますまいよ。

猛。美智子さんは何を言つてるんだい?

美智子。色々考へ直しても見ましたが、私は矢張、斯うしてゐるわけに參りませんの。

猛。と云ふのは?

美智子。八年前の、九年前の決心を、もう一度繰返すんですわ!

猛。復僕達から逃げるのかい?

美智子。ええ、逃げるんですわ——先刻、長谷部さんが逃げ出したやうに。

猛。そして僕を恐れてゐるのかい? 長谷部が僕を恐れたやうに。貴女も僕を?

美智子。ええ。

猛。ふうむ。

(二人とも暫く沈默。猛、そこに轉がつてゐる石材の一つに腰を下ろし、向ひ合つた石を指さして美智子にすすめる。美智子、すすめられる儘にかける。)

美智子さんも今、僕を恐れてゐると言つたね。然う言つてくれたのが、僕に取つては好い機會だ。これを機會に僕は、美智子さんに對する僕の——いや、美智子さんと云ふ人が僕の心にこれまでどんな影を投げてゐたか言つて置きたいのだよ

(先程から玩具を投げ出して、猛の言葉に耳を傾けてゐたみどりは、氣遣はしげに美智子の方へ近づく。)

みどり。小母さん、御父樣に叱られてるの? さうぢやないでせう?

美智子。(微笑して)さうぢやないの。

みどり。さう。ぢや可いわ。

(みどり、再び玩具を拾ひ上げ、美智子の脇に來て遊ぶ。)

猛。(みどりの遊んでゐるところを見入りなが

ら）美智子さんは、僕が此子の母を、あの芳子を、本當に愛してゐたことを知つてゐますね？　少くとも貴女は！

美智子。知つてゐますわ。知つてゐますとも。

猛。そして、芳子の死後に總勘定して見て、生前僕自身の計量してゐた以上に、ずつと以上に愛してゐたと言つても、美智子さんは本當にしてくれますか？

美智子。本當にしますとも。

猛。それでゐて、僕は矢張、あれを愛し足りなかつたといふこと、あまりに愛し足りなかつたといふこと、これも認めてくれますか？

美智子　然う御考へになるのに無理もないわ――猛さんとしてはねえ。

猛　ところで、若し僕が、生きてゐる者を愛するやうに、死んだ者をも愛することが出來ると言つたら、流石の貴女も馬鹿げてゐると言ふかしら？

美智子。いいえ、言ひませんわ。貴方の心の中では、死んだ人が死んでゐないんですもの。

猛。（目をつぶりて）然うだ。芳子はたしかに生きてゐる！　まだまだ、生きてゐる！

美智子。いつまでも、いつまでも生きていらつしやるわ！

（二人とも暫くの間、感傷的な沈默。）

猛。だが美智子さん、僕も、一たび愛した者を永久に愛しつづけたいと云ふ、時代おくれの理想家の一人です。そして其理想が、あまりにロマンティックすぎる夢想でもあつたなら！　切めて心の中に、いつまでも、いつまでも生かして置きたい、と思ふ人間が、いつの間にか死んでしまつたなら！

美智子。それは奧樣が、ここの冷たい土に御成りになつたのよりも、もつと、もつと悲しい、ことだらうと思ひますわ！

猛。美智子さん、よく言つてくれた。貴女が然うまで僕の心持を解つてゐてくれるのは、僕も本當に嬉しいよ。

美智子。さう仰しやつて頂くと、私も何だか嬉しいわ。（短き間）お別れしてからも、その御言葉を力に生きますわ！

猛。あ、然うだ！　貴女は復び僕達から逃げ出すつもりだと云ふんだね。そして僕を恐れてゐると云ふんだね、美智子さん、貴女は一體、どうして僕を恐れるんです。

（美智子、無言。ただ、さつきの紙包にしてあつた紙片か何かを疊んでゐる。）

それほど僕を理解してくれてゐて、どうして僕を恐れるんです？

美智子。貴方を恐れると云つたのは譃でした。本當は、貴方の、御側にゐるのが恐ろしいんです？

猛。僕の側にゐるのが恐ろしい？

美智子。ええ。御側にゐる私は、私自身が恐ろしいんですわ。

猛。ふむ。（短き間）今でも、矢張さうですか？

美智子。私は、いくら考へて見ても、奧樣の御亡くなりになつたのが殘念ですの。私の爲めにも、一番不幸な出來事でした。

猛。ふむ。

美智子。あの奧樣がいらしたからこそ、私は逃げおくれてゐたのです。そして、奧樣と御一緒にゐる間は、ちつとも私自身を恐れないでゐましたもの。

猛。さうですか？――美智子さんは！

美智子。そして何の不安もなく、猛さんのお友達になつてゐられましたもの。

猛。ふむ。それでは、美智子さんが何の不安も感じないでゐた時に、僕は、この僕は一番大きな不安を感じてゐたわけだ！

美智子。え？　貴方が？

猛。さうだ。芳子の生きてゐた時分には、美智

子さんにゐて貰つてるのが、僕に取つて、かなりの苦痛だつた。

美智子。まあ！

猛。それに對しては、芳子が立派に理由を拵へてゐてくれたにも係はらず——いや、然うではない——立派な理窟が立つてゐるだけに一層、僕は心苦しかつた。始終自分で自分の責任を逃げてるやうな疚しさがあつた。

美智子。まあ、然うですか。

猛。しかし、其疚しさを今から考へて見ると、何故の疚しさだつたか解らない。ただ僕は、芳子がなくなつた爲めに、一層安らかに、一層よく、あの女を愛することが出來るやうに思ふだけだ。（短き間）そして美智子さんは、あの女の生きてゐた間は何の不安もなく、僕のお友達になつてゐられたと、さう言ひましたね？　美智子さんは然う言ひましたね？

美智子。ええ、さう言ひましたわ。

猛。どうして斯う、入違ひにばかしなるものだらう？　僕は近頃こそ、本當に何の不安もなく、貴女のお友達になつてゐる。そして、時代おくれの理想家としてのこれからの僕の生活には、貴女のやうなお友達が、一層必要なものになつてゐるんです。貴女が何時までも、僕達二人と一緒にゐてくれて——

美智子。猛さん、もう何も仰しやらないで下さいな。愈々のお別れして行く私にとつては、もう此上の御言葉を伺はない方が、その方が仕合せのやうですから。

猛。ぢや、どうしても行つてしまふと云ふんですね？（短き間）だが、どう云ふわけです？——丁度今日こんなことを言ひ出したのは？　どう云ふわけです？

美智子。どう云ふわけと云つて——實は、このみどりさんと長谷部さんとが、少しばかり、私を賢くしてくれたのです。

猛。みどりと長谷部とが？（短き間）二人から何か、新しい事でも聞いたんですか？

美智子。ええ。少し。だけど、それがどんな事だかは訊かないで下さいな。つまらない事ですから——此間中から感じてゐたことを、ただ、判然さしてくれただけですから。

猛。然うですか。それなら僕も訊かないで置きます。（短き間）それで貴女は、美智子さんは、僕達から別れて何處へ行くんです？

美智子。何處へ？　私がこれから何處へ行くかと仰しやるの？

猛。ああ、何處へ行くつもりです？

美智子。さあ、何處へ行つたらいいか？

猛。貴女も、そんなさきの見えない生活に入るんですか？

美智子。ええ。だつて私も、今時の人々の物笑ひになるやうな、つまらない夢を見てゐる人間ですもの。私も地上に、『青い花』を求めてゐる人間ですもの。

猛。（暫く沈默の後、徐かに立ち上つて）それで、何時いよいよのお別れにします？

美智子。（同じく起ち上りながら）これから一應御一緒に歸つて、それから東京驛まで行つて見ます。そして其頃に出る汽車の、どれにでも乘つてしまひますわ。

みどり。（先程から、不安げに猛の顏と美智子の顏を見守つてゐたが、此時美智子の側へ寄つて來て）小母さん、どつかへ行つちまふの？（短き間）え？　小母さんの御宅へ歸つてしまふの？

美智子。（みどりを見下ろしながら）折角斯うして御近附になつたのにね！

みどり。小母さん、どうして行つちまふの？　あたしがいけないから？

美智子。いいえ、みどりさんは本當に好い御兒さんでした。貴女の事はいつまでも、いつま

でも忘れませんわ！

みどり。あ、、たし、つまらないわ——御父様とあ、、たしと二人つきりになつて。

美智子。これからはね、御父様とお二人で御參りなさるんですよ。（涙聲にて）そして折々は、この小母さんの事も思ひ出して下さいよ。

（猛、よろよろとよろけるやうにして二三歩後退りし、柵門の柱に凭りかかりて、手にさげてゐた帽子で、顔をかくしてしまふ。）

猛。（顔をかくした儘、センティメンタルに）み、、どりさん、小母さんに抱つ、、こして頂くがい、、！（短き間）明日からはもう、、手を引いて頂くことも出來ないんだから！

美智子。（目を拭つたハンケチを銜へて、兩手を差上げたみどりを抱き上げ）、、みどりさん！ 忘れないで下さいよ！ 本當に忘れないで下さいよ！

みどり。（泣きじやくりを始めて）、、、、あたし——も——悲しいなあ！

（、、みどり、愈々激しく泣き出す。）（幕）

（一九一七年十二月作）

◇

▼例へばゲエテの如き文豪に於て、彼が同性の、或は異性の友人なぞに宛てて書いた消息や、折々即興的に作つた小さな抒情詩などは、極めて自然に、正直に、眞實に彼自らを表現してゐる。これに比べると一代の大作『ファウスト』なぞは、なにしろ長年月の努力に成つたものだけに、いづれの方面から見ても、何れの部分を取つて見ても、みなそのやうに自然に、正直に、眞實に彼自らを表現してゐるとは言へないであらう。

しかし乍ら、『ファウスト』の中には、作者が同性の或は異性の、友人達に宛てて書いた消息や、折々の即興から作つた小さな抒情詩なぞに示されたのとは、到底比較にもならないほどの素張らしい自然さや、正直さや、眞實さをも、如何に多量に包容してゐることか。言ひ換へれば、そこで作者が日常生活に於けるより、一面稍や改まりすぎた、硬くなり過ぎた、氣取り過ぎた人間になり乍ら他面それを償うて遙かにあまりあるほどに、如何に人間の極限を盡して偉大なもの、崇高なもの、深遠なもの、精緻なもの、淸純なものとなつてゐることか。

▼更にフリイドリッヒ・ニイチェの場合を例にとつてもよい。彼が其母や妹に與へた書簡なぞを讀んで見れば、日常生活に於ける彼は、從つて普通人尋常人に共通した彼の人間性の一面は、實によく表出されてゐる。そしてそれらの書簡なぞに比べると、『ツアラトウストラ』の如きは、ゲエテに於ける『ファウスト』と同じく、少くとも非常にアムビシアスな計畫と努力との下に成つた物だけに、一面他處行きに過ぎた、開き直り過ぎた、正面を切り過ぎたやうな何物かを有つてゐることを否まれないであらう。

しかし乍ら、それにも係はらず、あの宿命的な恐ろしい作品の處々に於て、あの不可思議な制作の刹那刹那に於て、如何に彼が自然に、正直に、最も彼らしきものを示してゐることか、最も彼らしきものとなつてゐることか。否、あの詩作の高頂と全體とに於て、如何に作者自らが高人と超人とに近づいてゐることか、如何に作者自らがツアラトウストラそのものを生活しツアラトウストラそのものとなりきつてゐることか。

（『日常生活を偏重する惡傾向』より）